

Title	資料 近代沖縄の新聞にみられる蘇鉄（ソテツ）
Author(s)	当山, 昌直
Citation	沖縄史料編集紀要 = BULLETIN OF THE HISTORIOGRAPHICAL INSTITUTE(38): 25-70
Issue Date	2015-03-27
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/18765
Rights	沖縄県教育委員会

〈資料〉近代沖縄の新聞にみられる蘇鉄（ソテツ）

当山 昌直

はじめに

沖縄県教育委員会は、明治31年から昭和20年までの戦前の新聞から自然と人との関わりをテーマとした内容の記事を抜き出した『沖縄県史 資料編24 自然環境新聞資料 自然環境2』（以後県史資料編と略す）を2014年に刊行している。県史資料編には、これまで自然科学分野でよく知られていなかった近代沖縄の自然に関する情報が多く含まれており、自然科学の研究資料としても貴重と思われる。このような中、当山ら⁽¹⁾は、県史資料編の中からジュゴンに関する情報を収集し、ジュゴンの絶滅または絶滅状態の大きな原因の一つとして爆薬による漁があったことを報告している。

そこで、今回は、近代沖縄におけるソテツの利用状況や中毒事故等については県史資料編より抽出し、該当する記事または部分を掲載することにした。短期間の作業のため、内容の検討は行っておらず、記事の紹介のみにとどめた。今後のソテツ研究の一助になれば幸いである。

1. 方法

調査した近代沖縄の新聞は、県史資料編に掲載されているものを対象とした。次に収録されている明治31年から昭和20年までの新聞の中から、⁽²⁾「蘇鉄」「ソテツ」をキーワードにして検索を行い、ヒットした記事を抜き出した。さらに県史資料編の全文に目を通して関連する項目の点検も行なった。

2. 結果

検索の結果を記事の掲載年月日順に表1に示す。次に表1に基づいて記事内容を示した。記事は、整理番号、和暦、月日、新聞紙名、掲載面、みだし、記事内容の順で記した。なお、記事内容を県史資料編から抜き出して転載する方法については、下記の要領により行った。

TOYAMA Masanao: Information on The Cycad (*Cycas revoluta*) in Pre-war Okinawan Newspapers

(1) 当山昌直・仲地明・城間恒宏 (2014) 近代沖縄の新聞にみられるジュゴンの情報。沖縄史料編集紀要 (37): 39-58.

(2) 対象とした新聞の詳細については、県史資料編の凡例を参照

1. 掲載方法は、基本的に県史資料編の凡例にしたがった（県史資料編より抜粋）。

- ①旧漢字はなるべく新漢字に直した。ただし人名・固有名詞・漢数字については原則として原文のとおりとした。
- ②送り仮名、仮名遣いは、原文のとおりとした。ただし、変体仮名は平仮名に書きかえ、「ゐ」「糸」はそれぞれ「い」「え」に改めた。
- ③誤字・脱字は基本的に原文のとおりとし、できるだけ行間に「ママ」を並記した。
- ④新聞の活字が抜けているものや不鮮明で読めないものは□であらわした。なお、県史資料編では内容等から判断されるものについては行間に「*」を付して文字を補ったが、本稿では「*」をとった。
- ⑤编者による注記などは [] に入れて表記した。
- ⑥振り仮名は原文に付されていても一般的な読み方である場合には省略し、必要最小限にとどめた。
- ⑦省略箇所に適宜、[前略] [中略] [後略] [略] を付した。使い分けは以下のとおりである。
 [前略] 抜き出し箇所より前の項目や段落を省略したことを示す
 [中略] 抜き出し箇所内において、項目や段落を省略したことを示す
 [後略] 抜き出し箇所より後の項目や段落を省略したことを示す
 [略] 文章の一部を省略したことを示す
- ⑧みだしの副題については、「/」を付してみだしと並べた。
- ⑨人物が関連する記事について、内容によっては住所番地は◇で示し、人名はイニシャルとした（読みは任意）。事件・事故関係は内容によって住所氏名を省略した。

2. 県史資料編で記されている圏点や文字飾りなどは省略した。

3. 内容を変えない範囲で読みやすいようにレイアウト変更を行った。

4. 蘇鉄とは関連しない部分については、略した。略の仕方については県史資料編の凡例の方法で行った。

5. みだしに「蘇鉄」の文字がみられても、後日の新聞に同様な内容が詳しく報じられ、県史資料編では内容が省略しているのは、ここでは掲載対象から外した。

表1. 県史資料編の検索により得られた蘇鉄関連の新聞みだし（-：不明を示す）

番号	西暦(和暦)月/日	新聞紙名	面	みだし
1	1898(M31)5/5	琉球新報	1	久米島紀行(つゝき)
2	1898(M31)5/5	琉球新報	3	中毒患者数
3	1898(M31)9/21	琉球新報	3	蘇鉄中毒
4	1898(M31)9/23	琉球新報	2	渡名喜島の飢饉
5	1898(M31)12/3	琉球新報	3	鳥島饑饉の詳細
6	1898(M31)12/5	琉球新報	3	鳥島饑饉の詳細
7	1899(M32)2/26	琉球新報	3	久米島たより
8	1899(M32)3/18	琉球新報	2	栗国島たより
9	1899(M32)8/1	琉球新報	3	蘇鉄の中毒
10	1899(M32)9/29	琉球新報	2	学会彙報
11	1899(M32)10/1	琉球新報	2	三宅驥一氏
12	1899(M32)11/21	琉球新報	2	伊平屋島飢饉後の景況
13	1900(M33)3/5	琉球新報	3	蘇鉄の中毒
14	1900(M33)11/13	琉球新報	2	齋藤郡長の栗国島談
15	1901(M34)4/11	琉球新報	2	国頭雑信
16	1901(M34)4/17	琉球新報	3	蘇鉄の消毒薬
17	1901(M34)8/1	琉球新報	3	蘇鉄の中毒
18	1901(M34)9/7	琉球新報	3	蘇鉄の中毒

番号	西暦(和暦)月/日	新聞紙名	面	みだし
19	1902(M35)2/9	琉球新報	2	国頭間切りの飢饉
20	1902(M35)2/11	琉球新報	2	久米島の飢饉
21	1902(M35)3/11	琉球新報	2	那覇署長の伊平屋島談
22	1902(M35)3/19	琉球新報	2	国頭間切の飢饉 国頭間切の飢饉に就て 国頭間切凶荒見聞記
23	1902(M35)3/21	琉球新報	2	甘蔗の欠乏と蘇鉄
24	1902(M35)3/27	琉球新報	2	国頭通信(三月二十四日発)
25	1902(M35)3/29	琉球新報	2	国頭間切飢饉の実況
26	1902(M35)4/1	琉球新報	2	国頭間切飢饉の実況
27	1902(M35)4/3	琉球新報	2	国頭間切飢饉の実況
28	1902(M35)5/9	琉球新報	2	国頭の飢饉と薪木の低落
29	1902(M35)5/15	琉球新報	2	国頭地方飢饉の近況
30	1902(M35)5/19	琉球新報	2	ヒートの大獵(詳報)
31	1902(M35)7/3	琉球新報	3	蘇鉄の中毒
32	1902(M35)11/11	琉球新報	3	粟国島事情(一) 蘇鉄の中毒
33	1903(M36)11/5	琉球新報	2	座間味間切長の事跡(下)
34	1904(M37)9/13	琉球新報	3	蘇鉄の中毒患者
35	1904(M37)11/17	琉球新報	3	蘇鉄の中毒
36	1904(M37)12/17	琉球新報	3	蘇鉄の中毒
37	1905(M38)7/5	琉球新報	3	中毒のかぞかず
38	1905(M38)9/3	琉球新報	2	八重山群島(十四) 山野に於ける天然の生産物
39	1905(M38)11/5	琉球新報	3	蘇鉄の中毒(三人死亡)
40	1906(M39)4/1	琉球新報	5	島尻郡の澱粉製造高
41	1906(M39)4/11	琉球新報	2	菊池氏の沖縄観(三)
42	1906(M39)11/16	琉球新報	3	蘇鉄の中毒
43	1906(M39)11/20	琉球新報	3	蘇鉄の中毒(一家斃る)
44	1906(M39)12/12	琉球新報	2	鳥島の窮状 宮古島の風害余聞
45	1906(M39)12/28	琉球新報	2	宮古郡の暴風被害の状況
46	1907(M40)1/29	琉球新報	2	鳥島の状況
47	1907(M40)2/14	琉球新報	3	一家九名(全部)蘇鉄の中毒/二人は死亡
48	1907(M40)3/1	琉球新報	2	アンドレー博士と語る(二)/久米島は旧火山
49	1907(M40)4/17	琉球新報	2	渡名喜島の飢饉
50	1907(M40)6/25	琉球新報	2	与那国島の飢饉
51	1909(M42)3/31	琉球新報	2	蘇鉄葉輸出状況
52	1909(M42)5/21	沖縄毎日新聞	2	蘇鉄の培養
53	1910(M43)6/13	沖縄毎日新聞	3	沖縄みやげ(六) 毒蛇と自然界
54	1911(M44)7/6	琉球新報	2	慶良間一斑(三)
55	1911(M44)7/11	琉球新報	2	慶良間一斑(六)
56	1912(M45)7/27	琉球新報	3	蘇鉄を食て中毒/▽二名は死し一名は重症

番号	西暦(和暦)月/日	新聞紙名	面	みだし
57	1912(M45)7/30	琉球新報	3	蘇鉄中毒者遂に死す
58	1912(T01)8/11	琉球新報	5	又もや蘇鉄の中毒/▽夫妻共に死す
59	1913(T02)3/1	琉球新報	3	半年間の中毒者
60	1913(T02)8/4	沖縄毎日新聞	2	『琉球諸島』(一)
61	1914(T03)3/19	琉球新報	1	博物学上より見たる琉球(三)
62	1914(T03)6/24	琉球新報	3	飛耳張目
63	1914(T03)8/30	琉球新報	3	蘇鉄に中毒して/▽乳呑子を残して一家全滅
64	1914(T03)9/18	琉球新報	2	粟国事情
65	1914(T03)9/24	琉球新報	2	八重山の暴風被害
66	1914(T03)11/7	琉球新報	2	宮古通信/▽伊良部より
67	1914(T03)12/2	琉球新報	3	伊良部通信
68	1914(T03)12/15	琉球新報	2	粟国だより
69	1915(T04)2/16	琉球新報	2	渡名喜島の惨状/一千の島民饑に泣く
70	1915(T04)2/16	琉球新報	3	蘇鉄の実と売薬商
71	1915(T04)2/22	琉球新報	3	寄合話(廿六)
72	1915(T04)2/24	琉球新報	2	渡名喜島現況/一千の島民飢に泣く/回復期は五十日後
73	1915(T04)2/25	琉球新報	2	饑饉彙報
74	1915(T04)3/3	琉球新報	2	琉球饑饉史(六)
75	1915(T04)3/9	琉球新報	2	琉球饑饉史(十二)
76	1915(T04)3/11	琉球新報	2	琉球饑饉史(十四)
77	1915(T04)3/12	琉球新報	2	琉球饑饉史(十四)
78	1917(T06)6/22	琉球新報	3	蘇鉄中毒/▽二人は死亡し/▽七人は苦悶す
79	1918(T07)1/15	琉球新報	3	伊平屋の饑饉/◇島民甘藷の欠乏に苦む
80	1918(T07)1/16	琉球新報	2	琉球みやげ(七)
81	1918(T07)2/21	琉球新報	3	甘藷欠乏の悲劇/ = 蘇鉄を食つて死す
82	1918(T07)2/23	琉球新報	3	本県で最も適当な副業(一)/*県当局の調査せる物は十五*
83	1920(T09)8/7	沖縄時事新報	2	天然記念物調査/中野理学博士来県
84	[1921(T10)3/8]	[沖縄タイムス]	—	三年余も研究して漸く見届けた「蘇鉄の毒」/鹿島高農教授吉村博士/泰西の学説を否定
85	1927(S02)7/9	沖縄タイムス	—	県衛生課で……蘇鉄の毒素を研究/鹿児島高等農林の吉村博士の指導を受けて
86	[1927(S02)7/9]	[沖縄タイムス]	—	薬用や滋養に富む蘇鉄の研究/吉村博士近く発表
87	1927(S02)10/13	沖縄朝日新聞	2	蘇鉄地獄の食料(一) 久米島の旱害につき
88	1928(S03)9/8	沖縄昭和新聞	2	琉球の地割制度(二)
89	1932(S07)9/16	沖縄朝日新聞	—	久米島 植物採集記(2)
90	1939(S14)8/27	沖縄日報	2	蘇鉄の話(一)
91	1939(S14)8/28	沖縄日報	2	蘇鉄の話(二)
92	1939(S14)8/29	沖縄日報	2	蘇鉄の話(三)
93	1939(S14)8/30	沖縄日報	2	蘇鉄の話(四)
94	1939(S14)8/31	沖縄日報	2	蘇鉄の話(五)

番号	西暦(和暦)月/日	新聞紙名	面	みだし
95	1939(S14)9/1	沖縄日報	2	蘇鉄の話(完)
96	1940(S15)2/14	沖縄日報	2	支那向け輸出 ソテツ味噌/大量注文に応じ得ず
97	1940(S15)3/13	沖縄日報	2	含水酒精の原料に 蘇鉄も登場す/甘蔗の生取引を照会
98	1940(S15)3/15	琉球新報	1	酒精原料に蘇鉄使用/酒精会社で調査
99	1940(S15)3/18	琉球新報	2	酒精原料に甘蔗代用/原料会社で計画
100	1940(S15)4/1	沖縄日報	2	蘇鉄も重要資源に/澱粉製造業勃興す/南洋殖産五万トン目標
101	1940(S15)5/2	沖縄日報	2	座間味村で 蘇鉄の切干/急救飯米特配を陳情
102	1940(S15)5/13	琉球新報	2	蘇鉄を原料に 代用品発明
103	1940(S15)5/24	琉球新報	3	節米に蘇鉄食!/離島渡嘉敷村で切干貯蔵/一日一回は飯米代用に実行
104	1940(S15)7/11	琉球新報	4	蘇鉄
105	1940(S15)7/30	沖縄日報	2	蘇鉄味噌の原料と 販路の開拓を/醸造元・鶴田氏調査に来県す
106	1940(S15)8/1	琉球新報	3	けふの話題
107	1940(S15)9/19	琉球新報	3	蘇鉄の実や麦の代用食で凌ぐ/離島粟国村へ飯米増加要望
108	1940(S15)10/2	琉球新報	1	蘇鉄の実から 家畜の飼料/厚生省技師が資料調査
109	1940(S15)10/5	沖縄日報	2	蘇鉄澱粉/価格を指示
110	1944(S19)12/11	沖縄新報	2	蘇鉄で中毒死
111	1945(S20)1/23	沖縄新報	2	何でも食へるぞ、/野生植物の食糧化
112	1945(S20)2/5	沖縄新報	2	決戦食はこれで/学童動員し野草蒐め
113	[昭和] □年□/□	[紙名不明]	—	水無月と……面白い動植物季節/沖縄測候所の発表
114	□年□/□	[紙名不明]	—	◇世界一の大蘇鉄

1. 明治31年5月5日 琉球新報 1面

久米島紀行(つゝき) 黒岩恒

本島の民家は何れも石墻を高くし或は福木、榕樹等を栽えて暴風を防ぐ中には砂地を広く堀り窪めて其底に茅屋を結び更に四圍に石壁を周らしたるものもあり中々の名案と云ふべし海浜には黒き壤土の島地あり甘蔗芋麻を栽うるを見る村落の間には桑樹多し一ヶ処の井水海浜に在り深三四尺水量極めて少し沿海の地蘇鉄は少からされども阿檀は割合に多からず [略]

2. 明治31年5月5日 琉球新報 3面

中毒患者数

昨年中の中毒患者は三十五名にして内死亡者七名これを細別すれば赤メイバイ魚患者七名死亡者なし河豚にて十二名死亡五名ワタマ蟹にて一名カース魚アカメ魚オーメ魚にて患者四名死亡者なしハマシキリにて三名死亡者なし蘇鉄にて八名死亡者一名なりと云う

3. 明治31年9月21日 琉球新報 3面

蘇鉄中毒

粟国島西村◇◇番地平民S U二男M (三十一年) 全三女K (二十七年) の二名は去る十二日蘇鉄に赤豆粟の三品を混合したるものを食し午後四時頃よりは腹痛劇しかりし故医師を招き診察せしめたるに毒物腹中にありとて吐剤を投したるも嘔吐を催ふせざりしより遂に灌腸術を施したりしも三女Kは絶命し二男Mは生命には別条なしと云ふ

4. 明治31年9月23日 琉球新報 2面

渡名喜島の飢饉

渡名喜島は桃原村の前後其他二ヶ所に平坦なる耕地あれど尽く砂地にして面積広からず降雨せざること旬余なれば乍ち乾燥して蕃薯の如きは往々枯槁することありと云ふ東岡西岳の側傍には掌大の地面を拓き蕃薯を植へ多少の水田其間に散在せりと雖も水利の便を欠き収穫至て僅少なり蘇鉄は東南及び北方の山野に生長し山林河川等なし戸数百六拾七人口九百六拾四名あるを以て島中に住居して衣食するものとすれば三分一は蘇鉄を食ふも尚ほ足らずと云ふ故に古来商業を尊び大島群島に渡り貿易を以て生計を営み来りしも廢藩置県後該島の商業大に発達し収支相償はずして勢転業せざるを得ざるに至る依て爾後漁業者毎年増加して現今に於ては七拾四艘の剝舟と相当の漁具を有するに農事は全く婦女子の手に放任せる故耕耘の方法不完全にして牛豚履み糞の外他に肥料を施す術を知らず毎年五六月に至れば平坦の畑地は都て蕃薯を堀り取り粟を植へ付け其成熟するを待ち再び蕃薯を植る習慣ありて本年六月四日遙かに暴風吹き起り未だ熟せざる粟及び岡側の蕃薯都て吹き枯らされ後其一滴の降雨なく同月廿九日再度の暴風ありて粟は一粒も獲る能はず蕃薯も八分通りの収穫を減し蘇鉄に米粟を交へて食料とせり此の米粟は那覇より買ひ入れたるものにして輸入高概略二百俵以上に及ぶも尚ほ足らず目下貧困の者は米を買ふに錢なく畑に至るも芋なく専ら蘇鉄を以て常食とせり而して蘇鉄の製造法は至て錯雑にして直ちに食用とならず設令多少の蘇鉄を有する者と雖とも天氣の都合に依り製法完齋せざる時は或は一食二食を減することありと云ふ況や蘇鉄敷地を有せざる者に於ては親類及び近隣の恵を受け飢饉を凌ぎ居るも顔色青白にして一病人の如き者あり島内青年の男子は毎年陰曆六月廿五日以降久米島に渡りて漁獵を働き十一月頃帰島するに本年は非常の飢饉に遭遇し該島に渡り小屋掛け其他漁獵準備を終るまでの食料を用意すること能はず終に出船の氣力を沮喪し鬱々として島内に蟄居せる故益々食料の欠乏を来せり本年の如き凶歳は八十歳以上の老翁も未だ嘗て見聞せずと云ふ刻下飢饉に迫り居る者百八十五名にして男九十七人女八十人あり依て該島間切長より救助を願出たるを以て島尻郡役所に於ては不取敢粟百俵余紛米拾俵余を送りこれら窮迫者の救助に充てたりと云ふ

5. 明治31年12月3日 琉球新報 3面

鳥島饑饉の詳細

鳥島饑饉の概況は兼て報道せしが今其の詳細を得たれば左に続々掲載して以て読者諸君に報道することとせん

暴風後経過の状況 本年八月廿四日の暴風には蕃薯の損害は殆んど十分の六強にして其蕃薯葉は枯死し到底再茂の見込なきに依り被害の少き蕃薯の新芽を選びて漸く九月より十月に及んで移植を

終れり其後生茂の結果は宜きも其成熟を待て食糧に充つるは来年三月以降なりと云ふ左れとも本島は霜露の害を蒙ること往々ありて例年四五月頃植付の蕃薯さへ寒気甚敷に遭遇すれば忽ち腐敗することありと云ふ本年の移植は殊に其期節を後るゝ四五箇月余に及び居れば若し一朝霜露の降下に際会せば本年の蕃薯は十分に成熟する能はざるにはなきかとの老人の話にて候例年十二月以降に至れば蕃薯の葉は悉く枯爛して一葉をも止めず更に来春期に及んで新芽を出す趣きに有之其間の食料とする蕃薯は株毎に一個つゝ大なるものより堀取り食料と為すの順序なるも本年は風害少き部分は僅に十分の三強に過ぎされは目下現に株根より篋を以て大なる蕃薯を搜り堀り以て蘇鉄等と混用し食料に供する次第にて有之候然れとも此れとても本年中しか支へ得ること能はざる位にて加ふるに最早麦種時時期に付己むなく蕃薯は採取し本月中旬頃より麦植に従事せり被害後栽培の蕃薯を試みに採掘するに未だ指頭の如きものたになし家屋の全倒は三軒にして未だ小屋掛の儘にて本年中には建築の見込なしと云ふ半倒の分も過半は修繕せしも余は材料なき為め風害を蒙りし其儘にて漸く雨露を凌ぎ居境遇に有之候 (未完)

6. 明治31年12月5日 琉球新報 3面

鳥島饑饉の詳細

島民生計の状況 島民目下の生計は余程困難を極めし故早や既に出稼の為め鹿児島県徳の島へ渡航せし者五十四名の多きに至りたる次第なるか抑も全島本年の農作物は去る八月の暴風の為め非常の風害を蒙りしより収穫高頓に減少し従て島民の食料に不足を来し糊口常に困難なるより壮丁の男子は大概漁業に従事し獲物の幾分を干魚となし徳の島に齎らして穀物其他の日用品と交換し夫れもて漸く露命を繋きし有様なるか折悪くも目下冬季に向ひ海上常に荒波を打寄する時節柄なれば従て獲物減少し生計常に不如意勝なるより遂に徳の島に渡航し斯く口稼をなす次第なりと云ふさて又全島民中目下最も困難を極めしものは十戸人員六十四人にして是等の多くは老若婦女子にして労力其の他の仕事をなして自活の道を謀る術なきものにして殊に中には疾病に悩みし憫然のものもありて目今糊口に窮し見る目も悼はしき悲境に立至りたる有様なりしが其の他の島民には本年中は先づ免や角して風害残余の蕃薯を以て食料に充て得るとの事なれば一時救助を見合せ目下生活に最も困難なる十戸のものより救助を施したりと云ふ又全島民中八戸のものは右の困窮者と異なり平日の貯蓄もありし故左程生計に困難を感せざるより救助米を附与するの必要なしとて是れ又救助を施さざりし斯くて又右困窮者近日の食料は指頭大の蕃薯に蘇鉄を混交し来りしが全島は元来蘇鉄稀有の土地柄にして例年二月の候鹿児島県下沖永良部島より購入し来りしも折悪く本年は該島も饑饉の悲運に遭遇し蘇鉄購入の途全く絶へたるより全島民は一層困難を感したる次第なりと云ふさて又本年中は全島産出の蕃薯を以て漸く食料に充つるを得るも来る十二月以後に至れば島民日常の食料全く皆無を告げ唯頼む所は単に暴風後栽培しある未熟の蕃薯と徳の島出稼人の賃銀其の他の補助に依るの外別に良策なし是れ迎も上陳の如く指頭大の未熟の蕃薯を間断なく続々採掘して食料に充つるとせば来春の収穫従て減少し再度の饑饉は到底免るへからすとて彼此憂慮を抱く有様にて返す返すも実に不敏の次第なりさて又鳥島饑饉の詳細てふ標題には少々お門違ひの感あれとも全島教育の事を一言せんに島民中二三を除くの外は目に一丁字なきより全島駐在巡査山里勝獎氏は公務の余暇に全島児童三十名程を一堂に集め尋常護本の素読及び作文等の教授に余念なかりし由なるか全氏の談話に依れば教授する所の子弟も大に勉強し其父兄等も余の厚意を謝し今日となりては余程学問の必

要を感じ未頼母敷心地すると語りたりと云ふ (未)

7. 明治32年2月26日 琉球新報 3面

久米島たより 久米島生

[前略]

饑饉 去らぬだに島民の怠情にて生計常に困難なるに昨年暴風の結果にて農作物不振にて目下島民に於ては其困難は一方ならず候島民中一日三食の中二食は蘇鉄若くは菜類のみ食し芋は漸く其一食に宛つる程に有之猶甚しきに至ては三食共蘇鉄菜類のみを食する者も有之実に憫然之次第に御座候左れば孰れの家にて蘇鉄を屋外に曝さぬ所は無之其臭氣鼻を突くばかりに御座候

[後略]

8. 明治32年3月18日 琉球新報 2面

粟国島たより

[前略]

サガヤ屋原 と申処へ村山と唱て一面に蘇鉄繁殖致居候処右蘇鉄葉のみ銘々へ叶掛致し叶金は毎年旧十二月八日に殺し村中配当仕候牛代へ振向け居申候処近年に至ては島長か百姓中へ案内なしに伐採するなど我儘勝手の振舞有之人民は不平たらだらに御座候

9. 明治32年8月1日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒

客月二十三日の事とか国頭郡大宜味間切田港村K K (天保元年生) 妻U二男Kの三人蘇鉄に中毒せし旨該村々頭の届出に接し駐在巡查は早速現場へ出張し中毒前後の顛末を取調たるに客月二十日の朝Kは蘇鉄粉に白米を混合して粥を焚き妻U二男K一同朝飯を喫し間もなくKは妻Uを連れ田畑手入れの為め家出をなし家族等は宅にありて各々家業を稼きしに其の当日は何の異状もなかりしか翌廿一日正午頃よりK及び妻U兩人共少々頭痛を催せしに例の風邪と思ひ其の儘々畑へ出掛け同日午後六時頃帰宅せしに七時頃よりは兩人共少々不愉快を感じ同九時頃に至りては非常に腹痛を起し吐瀉をなせしより漸次身体衰弱して余程苦悶の体なりしより翌廿二日に至りては医師の診察を乞ひしも妻Uは薬石効なく遂に死亡しKは服薬後漸次吐瀉の度を減し目下治療中の由又二男Kは今に別條なしとの事にて妻Uは平良医師の診察に依れば蘇鉄にて中毒せし段鑑定したりと云ふ

10. 明治32年9月29日 琉球新報 2面

学会彙報

東京帝国大学理科大学植物学教室在勤三宅驥一氏は蘇鉄の受孕作用研究の為め去二十五日入港の金澤丸より来県池畑に投宿 [略]

11. 明治32年10月1日 琉球新報 2面

三宅驥一氏

帝国大学理科大学植物学教室在勤三宅驥一氏か蘇鉄の受奶作用研究の為に来県の由は既に前号の

紙上に報道せしか聞く所に依れば全氏は目下昼夜を兼ね師範学校なる博物実験室に在りて蘇鉄の受
奶に関し調査中なるか調査上の要点は精虫にありとの事なり [略]

12. 明治32年11月21日 琉球新報 2面

伊平屋島飢饉後の景況

近頃該島より帰りたる人の直話を聞くに客年全島に於ては前代未聞の大飢饉に遭遇し島民殆んど
頻死の悲境に立ち至りしより世の慈善家の義侠心に訴へ義損金を募集して漸く島民の飢餓を凌ぎし
事は今ま尚ほ世人の記憶に存する所ならんか [略] 故に昨年飢饉の際状況視察の爲め全島へ出張せ
し島尻郡長齋藤用之助氏は島民に勧誘するに勤勉貯財の必要を説き吏員及び人民等に向て其の実行
を促かせしに島長名嘉氏は大に感服本年一月に至り各村より人民聡代を集会せしめ勤勉貯財法風俗
改良法等の規約を設定せしに爾後其の成績著しく揚かり居るとの事なるか先づ其の規約の重なるも
のを列挙すれば [略] 三、荒蕪地を開拓利用して蘇鉄を植へ附け凶年饑饉の際食物の用に供する事 [略]

13. 明治33年3月5日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒

事少しく旧聞に属すれとも交通機関の開けざる離島の事とて再昨二日始めて我が社の耳に入りた
れば取敢へず爰に報道す本年一月三十日零時三十分頃の事なりとか慶良間島渡敷間切全村◇◇番地
平民F T女房K(安政六年生)長男T(十七)二男U(八)長女U(十二)家族四人蘇鉄の中毒に
罹りたる由なるか其原因は全二十八日全村◇◇番地平民S K方より乾蘇鉄一舂計りを貰ひ来り翌廿
九日其の蘇鉄に少許の白米を混炊して粥を焚き牛汁とゞもに母子四人正午、晩二度の食事をなせし
処翌朝五時頃となりては女房Kは何にか物に酔ひたる心持にて身体の工合も不斷の如く勝れず時々
嘔吐を催して吐瀉をなし胸部に稍々苦痛を感じる等其の他三人も病勢に軽重の差こそあれ右Kと大
同小異の病状なりしか全日午後二時頃に至りては漸次軽快に赴き翌三十一日には四人とも全く平状
に復したる次第なりとさて該蘇鉄は本年初頃S Kか取り入れたる物にて凡そ一俵位のものより僅か
三舂計り残り居りしを手籠に移し置き其の内一舂位は右F Kへ贈与し残る二舂は自分が喫したる処
Kも右同様稍々不快の感ありしか目下流行の感冒と心得其の俣々打過ごしたる次第なりと

14. 明治33年11月13日 琉球新報 2面

齋藤郡長の粟国島談

[前略]

[略] 食物 全島民中十中八九は蘇鉄を以て常食となしたる姿にて仮りに全島民を八百人とすれ
ば其の中百人は唐芋二百人は唐芋と蘇鉄残る五百人は年か年中蘇鉄を常食となす有様にて全島一ヶ
年の収穫高は平均四十三石以上に上ほり居るとの事にて粗末なる粟飯さへ正月及び盆祭の外は一切
賞味せしこと絶てなかりしといふ [略] 薪木 は余程不自由の土地にして重もにアダン葉に蘇鉄葉
を以てこれに充つる由なるか其の採取方法は自分の持地なる蘇鉄畑に至り鎌を以て其の葉を切り落
し一週間位を経過したる後銘々宅へ持ち運ぶよしにて終始輪伐をなす姿なるか中には蘇鉄畑の分配
を受けざるものは「サラカキ」杯を以て薪木用に供する有様なりといふ (未完)

15. 明治34年4月11日 琉球新報 2面

国頭雑信 全上 [一二子]

[前略]

国頭地方の飢饉 此年は未曾有の寒気にて玉走る霰にあわれ命の蕃薯は根葉打枯され国頭地方一体に飢饉を迎へねはならぬ有様と相成候唐木や麦粟は続々輸入せられ蕃薯粕は一舛六銭余に値を高め蘇鉄は所在に採掘せられ伝ふ臭気にも何となく悲歎の涙に臉を湿され候伊平屋島は殊に甚しとの事に候

[後略]

16. 明治34年4月17日 琉球新報 3面

蘇鉄の消毒薬

此の程国頭地方の或る村落に於ては唐芋欠乏の爲め先月頃より蘇鉄を採食する由なるか元来蘇鉄を食して其の毒に当り甚たしは即死するものさへありたる事は屢々吾人の耳にする所なるか或る実験□の語る所に依れば茲に一の妙薬ありそは何の造作もなく其の毒に当る時手早く家鴨の生血を取りて之れを飲まし玉はれ忽ち全癒して中毒の爲め非命の死を遂ぐるか如き憂なしと云ふ時節柄注意すべき事共なり

17. 明治34年8月1日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒

客月二十六日午後八時頃の事なりき国頭郡羽地間切屋我村◇◇◇番地MU (慶応二年生) 長女K (一年) 長男M (八年) の三人蘇鉄 (小豆と混合して食したる由) を食せしに其夜は何の異状もなかりしか翌二十七日よりUは腹痛を煩ひしも蘇鉄の中毒とは氣附かさりしに漸次全身衰弱を来し人事不省の姿となりて全日午後九時頃死亡せり又長女Kは母か煩ひ居るを心配し祖母を迎へに我部村前垣原に行き祖母同行帰宅の途□稍々不快の感ありて歩行も自由ならざるに依り祖母に背負はれて帰宅せしに祖母も流行の感冒と心得居りしに漸々衰弱して人事不省の有様となりしを以て祖母もいと不思議に思ひ長男Mに向て前後の様を問ひしに前夜蘇鉄を食したることを聞き初て蘇鉄の中毒なることを悟り直に人を遣ひして医師を迎ひにやりしに医師の診察を受くる猶予もなく全日午後八時死亡又長男Mも全日八日午後四時頃死亡したりと

18. 明治34年9月7日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒

客月二十四日の事なりき中頭郡美里間切山城村◇◇◇番地平民YK (明治元年生) 女房G (全二年生) 長男M (廿五年生) 長女K (全廿八年生) 二男K (全廿年生) の五人全日午前八時頃曩きに喰ひ残したる蘇鉄を唐米と混合して朝食を食せしに全日正午十二時頃よりは稍々腹痛を感じ全日午後二時頃に至りては腹痛ますます劇烈と相成り全日午後三時頃となりては大に苦悶の体にて折々大声を發して藻搔き居るにそ隣近所の人々早くもこれを聞き附け直に走せ集りて介抱に尽力なしながら一方には恩細間切仲泊の雇医大嶺某に急報して来診を乞ひしに医師は全日午後九時頃薬劑を携帯

して入り来りしもK及び女房Gは余程重症にて医師の治療を受くる間隙もなくKは全日午後八時頃Gは全日午後七時三十分頃夫婦枕を並へて果敢なき最期を遂けたる由なるか長男M女M二男Kの三人は早速解毒剤を服用せしため至りて軽症なりとの事なれば一命は留り止めるならんといふ

19. 明治35年2月9日 琉球新報 2面

国頭間切りの饑飢

国頭間切宇嘉美野喜辺にては目下大饑飢にて三食とも蘇鉄のみを食し居る由にて村民は大抵衰弱し歩行さへ自由に出来ざるもの多しと云ふ

20. 明治35年2月11日 琉球新報 2面

久米島の饑飢

全島は二三ヶ月前より唐芋欠乏し島民は蘇鉄のみを食し居る由なるが昨今は増々饑飢に迫り居れりと云ふ

21. 明治35年3月11日 琉球新報 2面

那覇署長の伊平屋島談

此れ迄で島は昨年暴風により非常に饑饉に迫られ居ることは暫々本紙に記載したるが今那覇警察署長の巡視談を聞くに左の如し全島民の食物 同島に昨年暴風の際潮雨暴風に吹き荒らされ植物は総て枯死して皆無の姿なれば島民は三食共に蘇鉄の切干に海苔と等分に混和し夫れに唐芋を少し交せて味噌醤油は愚か海水にて味を作り煮て雑炊の如くにして食する由なるが其の唐芋の大きさは筆の柄位の大きなりと [略] 蘇鉄の採取 蘇鉄の採取は一人一日に採取する高は四五人の家人が一週間位の食料を支ふるとのことなるが之れを切り干しにする処は総て海岸の砂原にてなし居れりと [略] 全島饑饉と蘇鉄 全島民は今通り蘇鉄を採食しても全島は野原広くして蘇鉄多く如何にしても尽きる恐れなければ此れより段々暖気にも向ふ折柄なれば遠からずして饑饉の困難を免かるゝならんといふ

22. 明治35年3月19日 琉球新報 2面

国頭間切の飢饉

社友の通信に拠れば国頭郡国頭間切は昨年十月に於ける暴風の結果昨今に至りては古来未曾有の惨情を呈せりと云ふ

元来同間切は交通極めて不便なる上耕地亦至て少なく例年なりとも食料は常に欠乏勝ちにして甘藷豊作の年にあらざれば蘇鉄を用いざることなし況んや昨今の如く中頭郡さへ全く欠乏を告ぐるに於てをや

[後略]

国頭間切の飢饉に就て

国頭間切飢饉の情況は別項通信にもある通りの次第なるが過日郡長出覇の際県庁に報告したる趣きは同間切人民が蘇鉄を食することは年々の例にして近来も矢張り之を用い居れどもこれ例年の事

別に救助を仰ぐべき必要なし云々

又警察部に來りたる報告に拠れば昨年二度の暴風に甘藷を吹荒されたる為め食料は専ら蘇鉄を以て充し居る趣きなり

乍然昨今の情況を以て年々の例とするは些と軽く見過ぎたるの疑なき能はざるなり同間切に於て蘇鉄を食料に充つるは成程年々の例には相違なきもこれ芋の不足を補充するに過ぎず本年の如きは勝連与那城の如き耕地の広き場所柄さへ既に甚しく欠乏せるの今日国頭間切の宇嘉、辺野喜辺なれば全然蘇鉄によるの外なかるべし

例年の蘇鉄は耕地の少なき為め芋の補充として用ゆるものなれども本年は近来稀有の風害に加ふるに金融の逼迫林産物の不捌け等種々の事情混集せりこれにても年々の例視するは不当の視察と云はざるを得ざるなり只今日の疑問は果して官の救助を仰ぐべき程度に達し居るや否やの点にあり

国頭間切の人民が異常の困苦に迫れるは少しく同間切の事情に通ずるものゝ直ちに同情を表すべき事柄なりとす本県中哀なる生活をなし居るものは八重山の或部分を除いては国頭間切の各村なり其蘇鉄を食料に供せざるの年なきを見ても知るべし尤も林産物には富める故平年なれば之を以て米麦杯に換ゆるの方便もあれども本年の如き金融逼迫の年に際しては困苦窮迫の状実に見るに堪へざるものあるべし

斯る通知に接する以上は兎に角其実況を視察するの必要あり視察の結果によりては大に世の仁人義士に訴へて以て国頭人民の困苦を救助する方法を講ずることあるべし

国頭間切凶荒見聞記 在国頭 漂蕩生稿

昨年十月の暴風は非常に吾が農産物を害し就中常食用蕃藷の如きは悉皆吹き枯らされ十月中は不十分なからも田畑芋或は蘇鉄杯を以て常食に充て居たりしも十二月比よりは蘇鉄も払底し宅地或は畑地杯には野菜畑全く無し漸く山山々野内より艾葉等の天然菜杯を採取し辛くも命を繋ぎ居る有様にて最早山山々野杯に於ても野菜類相絶し他に常食用に供すべきものなきも蕃藷の出先干今見込相立たす実に古来未曾有の凶荒なり

[後略]

23. 明治35年3月21日 琉球新報 2面

甘蔗の欠乏と蘇鉄

近来は甘藷欠乏の為県下各地方五六分通りは蘇鉄を食料に供し居る由なるか蘇鉄には一種有害の分子を含み能く注意して調製をなさざるに於ては不慮の災難に罹り中には可惜生命を失ふて取り返しの付かざる悲運に遭遇することは数々我輩の聞知する所なるか先づ其の三ヶ年間の中毒患者及び死亡者の数を挙ぐれば左の如し

明治三十二年 患者四 死亡者一

同 三十三年 全 四 全 一

同 三十四年 全 八 全 五

24. 明治35年3月27日 琉球新報 2面

国頭通信 (三月二十四日発) 於大宜味 天南

[前略]

郡役所よりも書記岡山竹次郎氏出張致し候に付同伴して二十三日正午名護を出立致し候羽地間切源河村までは飢饉と云ふ有様は少しも見へざりしが大宜味間切津波村に入りては家々に干しある蘇鉄を見て忽ち飢饉の感に打れ候村事務所に就て聞けは芋は少しもなく唐米と蘇鉄を常食と致し居る由に候塩屋村にての話に拠れば当間切にては津波と喜如嘉村が甚しく津波の如きは年内より蘇鉄を用たる趣きに候

[後略]

25. 明治35年3月29日 琉球新報 2面

国頭間切飢饉の実況 於奥間村 天南

[前略]

十二時過ぎいよいよ国頭間切役場に到達致し候間切長はヤツキになりて過日社友より受けたる通信の無実なるを弁し候先つ弁駁の要領を左に記載可致候

第一 蘇鉄を食ふことは年々の例にして之を食ふからと云ふて飢饉とは云ふべからず云々第二昨年暴風の為め甘藷を傷害せられ芋は辺戸村杯三日に一食位ひに過ぎざれども唐米ある故食料には左支へなし云々、第三旧正月に豚を食ひたるものなしとあれどもこれは芋欠乏の為め屠殺して却つて例年より多く食ひたり云々第四要するに芋は大に欠乏を告げたれどもこれが為め餓死するが如き惨状には決して至らず先つ平生の生活は例年と左程異なりたる所なし云々第五薪木も磚板も半値とあれども薪木は平生二銭のものが現金引換へなれば一銭四厘物品との交換なれば一銭九厘にて林産物は切出しさへすれば直ちに捌けると申居候

同じ吏員の内にも林産物の相場は例年と少しも異ならずと申すものもこれあり何分信を置き難き節少なからず候彼等は報告を怠りたるの罪を問はれまじきやの心配を以て充され居り候故事実を問ふも兎角弁じがましき候向あり実見したる上ならでは逆も実情得難しと覚悟致し此日は大抵にして切り上げ候

本日午前十時より刳舟一艘を貸し辺野喜村へ赴き実況を視察致し候この村は七十余戸の村にて候へども荒屋破垣一目貧村たるを表彰致し候間切内にてこの村と其北隣なる宇嘉村が最も窮迫致し居る趣きに候この村は芋と云ふては少しもこれなく全然蘇鉄にて生命を繋ぎ居る有様にて候尤も林産物と交換して僅かばかりの唐米は用い居る由に候へども他は実に些細のものにて候

小学校の校長を訪問し飢饉の為め生徒の出席杯には影響せずやと相尋ね候へば出席には別に影響せざれども食物の悪しき故にか概して不活発となれりこの南に佐手と云ふ村ありこの村は今猶ほ芋も欠乏せざる故該村の生徒と較ぶれば体力に於て稍異なる所あるが如し云々と語れり

これより宇嘉村を視察致し候この村も窮迫の程度に於ては辺野喜と甲乙これなく矢張り全然蘇鉄を以て命を繋ぎ居るものと云ふて差支これなく候

宇嘉に於て駐在巡查の話に聞くに辺戸村は耕地も広く人民も稍豊かにして元来宇嘉辺野喜杯と比較になるべき村にはあらねど昨年風当り尤も烈しかりし故旧年内よりの窮状は尤も惨憺たりしが昨今は船便もあり随つて唐米も来りたるを以て稍其度を減したり旧年末の頃は北風勝ちにて船も来らず附近の各商店共米も品切になり金融逼迫の為め林産物は現金売買容易に行はれず左りとて遠方ま

で薪木樽板を持行き交換する訳には参らず山野杯も各自配当したるに依り山野を所有せざる者杯は蘇鉄にも困ると云ふ始末にて食物の為め一□□顔も膨れたるものありき左れど来月の中旬に至れば麦もとれるし又今よりは船便もあれば最早氣遣ひなしと語れり

辺野喜、宇嘉の二村は本年旧七八月即ち芋かとれる迄は今日の如く蘇鉄に依頼するの外他に生活の途これなく候猶ほ委細の事は後便にて報道可致候

二十五日午後九時奥間村の客舎にて認む

26. 明治35年4月1日 琉球新報 2面

国頭間切飢饉の実況 於大宜味 天南

国頭間切の飢饉は略前便より報道致したる通りの実況にて候那覇にては目も当られぬ惨状ならんと想像致し居候処辺戸村の如き旧年末より正月にかけては北風のみにて船便全く相絶へ為めに各店共唐米品切れと相成り土地の産物とて食料に供すべきものは蘇鉄の外には皆無の有様その蘇鉄さへ山野を所有せざる者は買入れて用ゆると云ふ始末なりしも金融逼迫の影響はこの辺に及ふこと一層甚しく山より薪木樽板杯伐り出すも現金にて引取るもの少なく種々雑多の事情混迫して一時は非常の窮境に瀕したること全く事実と存し候乍去二月(旧)以来は米も来り目下宜名真(辺戸村の内)の商店には唐米も十俵位ひはこれある由に候又林産物の如きも伐り出しさへすれば現金引換へは少くとも品物との交換は容易く行はれその上来月の下旬よりは新麦を収穫すれば一時惨状の第一に数へられたる辺戸村は最早少しも氣遣ふことなかるべく候

[後略]

27. 明治35年4月3日 琉球新報 2面

国頭間切飢饉の実況 於名護 天南

[前略]

余は現に宇嘉村に於て村民の昼餐を求め一すゝりすゝりたることこれあり候余も田舎を遍歴し随分粗食を喫したることもこれあり候へども一日位ひ断食するとも逆も喉を辿るべくも思はれず候然るに居合したる人々の話に拠ればこれ等は蘇鉄の料理中では先以て上等の部類と申し候

序でに蘇鉄の拵へ方から料理法を一寸御話可致候先つ蘇鉄の幹をとり刀にて其皮を削り去り之を一分位の厚さに切り清水にてよくよく洗ひ然る後積重ねて醗酵させ之を干して用い候之を俗にキカラーと申し候余裕あるときには芋葛を製する様にして葛をとることもこれあり候乍去葛杯は余程贅沢の方にて斯んな飢饉の折には及びもつかぬことにて候

調理法はキカラーを器につひて糊をたく様にするもあり又味噌を入れてたくもあり碎かずに野菜杯を入れて煮るものもこれあり候余が試みたるは糊にて漸く箸にかゝる位ひ之に油を菜にして食ふものもあり奮発した処で味噌(と云ふも蘇鉄にて製したるものと知るべし)汁を添ゆるもこれあり候

唐米を用ゆることは前々便にても報道致したる次第なるが都人士の中には芋がなければ唐米を用ゆる故却つて美食で結構ではないかと疑ふものも可有之候へども大鍋に三合位ひの米を入れ野菜やら蘇鉄やらごつたまぜに煮て食ふ訳にてだしの様にして用ゆるに過ぎずこれとても三日に一食或は

五日に一食と云ふ有様にて候

[後略]

28. 明治35年5月9日 琉球新報 2面

国頭の饑饉と薪木の低落

国頭郡にては二三ヶ月前より蘇鉄を常食する程饑饉に迫り居りしが近頃に至りては薪木を以て唐米と交換するもの非常に多くなりたる為め薪木は増々低落する模様なりと云ふ

29. 明治35年5月15日 琉球新報 2面

国頭地方飢饉の近況

国頭地方中飢饉甚だしき所は北方の村落にして其の他は左程の苦痛を感じず臈て大麦、米穀等の収穫期に至らば先づ先づ安心するならんとの予想なりしも折悪しくも数ヶ月の旱魃のため痛く影響を被り目今の所にては全郡通して蘇鉄を混食し居る姿にて加之も昨年来金融逼迫のため一層困難を来し昨今は三度の食事も甚だ覚束なき有様にて昼食杯は麦の粉に黒砂糖を交ぜ糠味噌汁の如き食物にて兎や角露命を繋ぎ居る次第なりと

30. 明治35年5月19日 琉球新報 2面

ヒートの大獲 (詳報)

本月二日午前十時比百頭余の海豚(ヒート)名護湾に寄り来るを見るや沿岸の各村人民にして刳船或は伝馬船を所持せし人々は孰れも乗り出し海岸を距る凡そ八合位の沖合より追ひ来り所持船なきもの共は思ひ思ひの器具を携へ海中へ飛び込み四方八方より散々に打ちたれば長大なる大魚も勢ひ逃る能はず午後三時比迄には全く捕獲したり然り而して其捕獲せし頭数を挙げれば許田、数久田、世富慶、東江、城、大兼久、宮里、宇茂佐の八ヶ村分並に糸満人其他の局部の者共が捕獲せしもの等を合すれば都合一百三十頭余なりき而して其数量を聞くに小き者五百斤大き者三千斤なりと依て之れを五百斤平均にせば其数量六万五千斤なり之を壹斤代価四銭(目下相場五銭なれども日々本部今帰仁其他より陸続来り買ふもの多き為め今や一面識もなきものには容易に売らざる有様なり)とすれば其総金高二千六百円なり嗚呼本郡に於ては昨年十一月風災の結果今や名護人民も重もに蘇鉄を常食とし極々困難の場合斯る大魚の捕獲ありたりしは全く天与の幸福と言ふべし因に記す右は余が最初に浜に於て調べたる概数にて漏れなく調査せしものと言ふ能はざるは遺憾の至りなりと雖も然も斯る大魚殊に非常の捕獲数なれば必ず県報にも掲載せらるゝ積りなれば猶ほ其詳細の所は官報を待ち賜へ(実見生投)

31. 明治35年7月3日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒

蘇鉄の中毒も魚の中毒と同しく能くある事にて人々の注意すべき事なるか去六月二十三日島尻郡仲里間切比嘉村J S(六十八年) 全人妻K 全人長男S R(廿九年) 全人三女K(二十六年) 全三女K 私生児N(五年)の五名蘇鉄を芋に混して食したる為め其毒に当りて三女K 全人私生児Nの二名は全日夜にSの妻K 全長男Sの二名は全廿五日に死亡し家主Sも亦た医療の甲斐なく全月二十七日

遂に死亡したりと云ふ

32. 明治35年11月11日 琉球新報 3面

粟国島事情 (一)

[前略]

同島 は那覇を距る西々北三十海里余の所に在ありて周囲三里位の一小島なり戸数七百四十余、人口四千八百余あり土地は平坦にして山林なく全島畑と蘇鉄畑との二種にして村内住家の外は絶て樹木なきの有様なり畑は甘蔗を除く外甘藷を始めとして粟麦黍大豆等の雑穀を生産し蘇鉄畑は殆んど全畑地の過半を占め其生産する所の蘇鉄を以て毎年食料の補足とし其葉は乾枯せしめて一年中の薪料に供するなり蘇鉄を以て毎年食料の補足とするは本島人の目より観れば聊か異様の感あれども上記の如く同島は面積に比し人口割合に多きか故に普通の雑穀のみにては到底其全体の需用に應ずる能はざるを以て勢ひ蘇鉄を以て其食料の補足とせざるへからざる事情あり又た山林なきか故に薪木に乏しく従て蘇鉄葉を以て其用に供せざるへからざるなり是れ生活の情況に於て本島と大に其趣きを異にする所以なり

蘇鉄の中毒

宮古郡下地間切仲地村KH (三十八) 妻K (三十八) 長女M (十八) 長男H (十三) 二女K (七年) は去十月二十一日蘇鉄を蕃薯に混じ煮飯となし一同昼食を為したるに全日午後七時頃より一同全身に倦怠を生し間もなく嘔吐し且つ下痢する等の一層の苦悶を為し言語も通せず人事不省の容態となりたれば近隣の者共周章直に医師を招き治療に手を尽したれと長女M長男Hの二人は其翌二十一日午前四時にK夫婦は同日午後五時に死亡したる由二女Kは経過宜しく次第に快癒の様子にて生命に別条なかるべしといふ

33. 明治36年11月5日 琉球新報 2面

座間味間切長の事跡 (下)

蘇鉄植付の事 本県各地方一般凶歳の際食料欠乏を告ぐる時は蘇鉄を以て一時の窮を濟ふの常なるが殊に全間切は那覇を距ること二十二海里の慶良間群島の一にして交通極めて不便なるを以て凶荒に備ふる蘇鉄の保護は本島に比し最も注意を要する事なるに然るに島民一般前述の思慮なく随て伐採すれば随て保護するの道なく伐採のまゝ一時の需用に充たしたるに任せ漸次荒廢に歸するを憂ひ一昨三十三年より島民を奨励し農事の余暇を以て毎年植付けの事とし既に各村に於て其植付反別一町歩余宛あるに至れり

[後略]

34. 明治37年9月13日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒患者

慶良間島渡嘉敷間切全村のAU全Uの両名は去月十八日正午十二時頃蘇鉄の断片を米に混し雑炊にして食したるに兩人とも数時間の後は頭痛と共に顔色蒼白となり二三度も吐瀉を為したるも中毒とは思はず同日の夕食及翌日も同様の食事を為したるに病状次第に重くなりて腹部は次第に膨張し

数度の嘔吐を催して身体著しく衰弱したるを以て大に驚き始めて医師の診察を受け服薬せしも其甲斐なく遂に去二十二日午前六時頃死亡したる由なり

35. 明治37年11月17日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒

宮古郡平良間切仲宗根村士族S E (卅九年) 全次男J (十二年) 全三男J (十年) は去月廿九日午前九時頃全日の朝飯に蘇鉄の雑炊を各々一椀位宛を食せしに約四時間を経過せる後に三人共に口腔及咽頭に一種刺すか如き感覚を生し続て同粘膜の分泌物を各流出し同時に嘔吐を催し胃腸は堅硬とりて拘攣し蘇鉄の中毒に相違なければ直に医師の治療を受け居れたりといふ

36. 明治37年12月17日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒

宮古郡平良間切荷川取村のS Kは去月十六日午後二時頃蘇鉄に甘藷の葉と噌味を混入して昼食を調理し妻K長男K (三十二年) 四女K (十六年) 長男妻M (廿九年) 長女K (八年) 孫二女K (四年) 孫三女M (当年五ヶ月) と共に食し夜八時頃に至りK夫婦及び長男Kの三名にて中酒四合を傾け遊る後ち家族一同芋と味噌汁にて夕食をすまして寝に就きたる□翌十七日午前一時より孫K同二時頃より長男妻M同朝八時頃より毒Kは孰れも腹痛を覚え忽ちにして人事不省の状態に陥り早速応急の手当を為したる甲斐なくKは全朝三時頃Kは午後二時頃Mは全朝八時頃孰れも死亡せりといふ四女Kは午前二時頃より腹痛を催し並に下痢を為し午後四時頃二回嘔吐を為したるも生命には別条なく其他の人々も別に異状なかりしと

37. 明治38年7月5日 琉球新報 3面

中毒のかぞかず

宮古郡下地間切国仲村のT K (四十九年) は去月十五日午前十時頃昨年干晒せし蘇鉄を養豚用として調理したるに如何にも味ある摸様あるより食慾生し乃ち之に煮魚を交ぜ長女K (七年) 長男K (六年) と共に食したるに翌日より三人とも頭痛すると共に大熱を發し数回嘔吐を為し人事不省の大患となり三人とも遂に死亡したり [略]

38. 明治38年9月3日 琉球新報 2面

八重山群島(十四) 山野に於ける天然の生産物

八重山全島の山野に於ける天然の生産物は実に枚挙するに遑あらざるを以て茲に其最も著名にして有益なるものゝみを摘載し以て之を世に紹介せん

[中略]

蘇鉄 従来本群島に於ては専ら飢饉の予備として其繁殖を図りたるも近年に至り工業上必要なる植物となり其葉は干して帽子花瓶手籠等の材料に供せられ又実及び幹は澱粉を製し得るのみならず酒精製造の原料に供せらる故に他日其製造法の盛んなると共に充分需要の見込みあり

[後略]

39. 明治38年11月5日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒 (三人死亡)

国頭大宜味間切塩屋村のY T 姪K (十三年) 下男K (十二年) 全K (十四年) の三人蘇鉄の中毒にて死亡せり其顛末を聞くに去月十六日は旧の九月十八夜とてY T に於ては慣例に依り月待の宴を開き去三月採取せる蘇鉄の料理を肴に家族親類都合十五名にて飲食せり当時は勿論翌日に至りても何ともなかりしに其翌十八日午後十二時頃より上記下男のKは大に熱を發して嘔吐甚しく全Kも亦其翌十九日午前四時頃より発熱しKと同一の苦悶を為し引続きKも同様熱を發したるにぞ家族は始めて先日食せる蘇鉄の中毒なるに気づき医師を招きて治療を施したれど時既に後れたりしにや全日三名とも相前後して死亡したり斯くと見て他の十二名の人々も大に驚き解毒剤を服したるに孰れも多少の中毒はありしも重症には陥らずして全治し最早や平常の健康に復し居れりといふ

40. 明治39年4月1日5面 琉球新報

島尻郡の澱粉製造高

其筋の調査に係る昨三十八年中島尻郡に於ける甘藷及蘇鉄の澱粉製造高甘藷澱粉の原料は一百二十六万七千八百四十三斤(価格六千〇七十二円六十銭)にして之に対する製造高は十二万五千七百五十八斤(全六千四百四十円七十六銭)となり又た蘇鉄澱粉は原料八千五百斤(全約三円五十銭)にして之に対する製造高は二百四十五斤(全約九円三十一銭)なり即ち通計原料百二十七万六千三百四十三斤其価格六千〇七十六円十銭にして之に対する製造高は十二万六千円〇〇八銭其価格六千四百五十七銭なり

41. 明治39年4月11日 琉球新報 2面

菊池氏の沖縄観 (三) (大阪毎日所載)

憐れなる粟国島 (続)

彼等は殆んど食ふべき食物を有せず粟国の自然を飾る美はしき蘇鉄は彼等のためには実に一日もこれ無かるべからざる生命の鍵なるを知らずや米なく粟なく甘藷なき一有るも素より需要に充るに足らずし一島民は僅に蘇鉄の幹によつて腹を充し薪を有せざる彼等はまた僅に蘇鉄の葉によつて炊煙を揚げ居るなり余等を迎へたる島役場の吏員は曰く我等は目下米を絶ち粟と麦とによりて僅かに腹を肥し居れりと役場員然り島民に至つては嘗て米の飯の口に入る事なきたゞ非常の珍味として南京米の粉米の輸入せらるゝあるのみ平常口にするところのものは即ち蘇鉄の幹より製せる粗悪の穀粉と少許の麦若くは甘藷をつき雑て製せる内地にては犬も食はぬ食物なり

[後略]

42. 明治39年11月16日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒

国頭郡名護間切名護村桶職H U (四十一年) 妻K (四十年) 長男U (十五年) 次男E (五年) の四名は去十一日夕飯に蘇鉄と南瓜を混ぜたる雑炊を食したるに暫時にして腹痛及び吐瀉を催したるを以て直に医師の診療を受け応急の手当を為したれども其甲斐なくU、K、Uの三名は翌十三日未

明に死亡し次男Eは経過稍々宜しく先づ以て生命には別條なしとなり

43. 明治39年11月20日 琉球新報 3面

蘇鉄の中毒 (一家斃る)

国頭郡名護間切名護村H U (四十二) は去る十二日午後六時頃夕飯に本年三月より貯はへ置きたる蘇鉄を炊きU妻K (四十年) 長男U (十年) 次男E (六年) 一家四人共に食せしがU及KUの三名は翌十三日午後六時に至り中毒して死し同日午後八時半にはEも中毒して死にたりと

44. 明治39年12月12日 琉球新報 2面

鳥島の窮状

鳥島といへば誰も知る如く過船噴火したる島にして当時の住民等は救ふべからざるの悲境に陥り早速久米島具志川間切へ移住することとなりたるが鳥島には硫黄の産出あるを以て貧民出稼し今尚ほ幾多の住民存在して硫黄の採掘に従事せる由なるが過日の暴風に際し硫黄採掘の為に設けられたる建物は殆んど破壊せられ硫黄業さへ中止せんとするの悲境に迫り暴風後即ち先月中旬頃よりは料食に窮し住民一般に未熟の甘藷を採り又は蘇鉄を食する等憫状を極め居れり之が為め徳の島より料食を輸入せんが為め船を差し向けたるも徳の島とても剰余の量食を有するに非らざれば僅々米三俵大豆五俵を買入れたるのみにて之亦直ちに食ひ盡し目下久米島等へ移り行くもの多し云々と某氏の私信に見ゆ

宮古島の風害余聞

十一月中旬に於ける宮古島の風害に就きては当時の紙上に報じ置きしことなるが其の風害の度に至りては昨年当地の暴風のそれよりも一層の惨状を極めたりとのことにて親しく同地を視察して近日帰着せる旅客の談に依るに去月十一日より十三日に懸けての暴風は宮古島に有らん限りの暴威を振ひたるが如く木となく草となく其の独特の色を失ひ黄又白色に變じ山に富みたる宮古全島当盤の松を除くの外满目嘯々一点の緑を残さず宛然荒涼たる枯野と化し去り甘蔗は葉裂け茎折れて其の風致ある姿は再び見るべからず試に之を採りて砂糖を製せしに到底黒糖となすこと能はざる程にて今後僅に白下を製することを得べきか甘藷は風の吹くが儘にて蔓を揉みちきられ葉は黒枯れとなりたれば挿苗の見込なきのみか既に食料欠之し三食を減じて二食となし漸く口糊を凌ぐのみなれば遂には家畜牛豚を挙げて屠殺し尽し蘇鉄を食し生を繋ぐ有様にて只四方松原村附近のみ其の災害を逃れ居れり小学生徒の出席数も劇に減少し適々通校する生徒も遅刻甚だしきに依り同島の某小学校校長が其の原因を精査せしに生徒は食すべき朝飯なく早朝より畑に出で、僅に芽を生ぜる甘藷を掘り集めて帰り之を朝飯として食したる上登校すといふ

45. 明治39年12月28日 琉球新報 2面

宮古郡の暴風被害の状況

宮古郡暴風雨の状況は取敢へず当時の紙上に報したるか尚ほ其一般の被害の状況、農作物の被害、暴風後貧民の生計^マ状態等に區別せは左の如し

一搬^マ被害の状況

本郡は前後二回（第一回は十月廿日より廿三に至る間第二回は十一月十一日より十三日に至る間）七日間の暴風雨にて殊に十一月十一日より十三日に至る暴風雨の如きは三十年来初めての強風雨にて為めに最も頑強なる阿豆葉蘇鉄松樹に至る迄（位置により）枯れ果て福樹の外他植物にして緑葉を有するものなく中幹より或は根部より吹き倒され一見火災後の如き観あり建物も兼て暴風に顧慮し築造せられしのみならず旧廢に属するものは十月の暴風雨に倒潰せられしを以て此度の暴風には割合に其被害少く狩侯村に十二軒の全潰ありしのしのみにて各村共二三軒の潰家ありしのみ

〔後略〕

46. 明治40年1月29日 琉球新報 2面

鳥島の状況

鳥島詰の巡查下村哲一氏か去る九日發送したる報告書に依れば目下鳥島に居住せる鉱夫等は食料欠乏の為めに大に困却を來し居る由なるが今其の報告の内容を少しく記載すれば左の如し

鳥島にては昨年九月十一日以後瀛船の航海全く絶へて範多、河都の事業主は金員及び米味噌^{きんいん}全く欠乏したるより昨年十一月以来電報にて幾回となく瀛船の來航を促したるも其の後一回の返電もなく島民一同憂慮措くは能はず已むを得ず範多の事業は本月六日より原鉱採堀を中止し居民百九十八名は瀛船の來航を毎日待ち兼ね居るも其の甲斐なく大に困却を極め居りしに村事務所に於ても食料全く尽きたるを以て本年に於ては再參集會を催し徳ノ島又は沖永良部へ剝舟より渡航し其^そ処より電報にて瀛船の來航を促したるに知多丸は十二月十五日鳥島へ航行したる旨返電ありたるも一月九日の今日迄該船入港せざるより他府県人四十名と島民中の小兒等は皆蘇鉄又は大豆にて糊口を凌ぎつゝあるも知多丸にして本月中旬頃迄に入港せざりし時は島民一同餓死するに至るべしと云ふ而して範多の原鉱採堀の事業も全部引き揚げ知多丸より全島を出發せんとて鉱夫等は昨今荷物の片付け^{ママ}杯に余念なかりしとぞ

47. 明治40年2月14日 琉球新報 3面

一家九名（全部）蘇鉄の中毒／二人は死亡

所は宮古郡平良間切島尻村◇番地I S方家族九人残らず蘇鉄の中毒をなしたる顛末を聞くに宮古郡は過日の暴風來食に窮し蘇鉄を採らざる宅は極めて少き由なるが右S方も二ヶ月前蘇鉄を採り來り薄く刻みて日に干し四五日前に水に浸し更に洗淨して藁に包み置き三四日を経たる後之を取り出し豚油を混せて煮付け家主S（七十六）を始め長男K（四十五）金三妻M（四十七）孫K（二十四）K妻K（二十五）孫K（十一）全K（七）全K（三）曾孫M（四）の九人共去る二十九日の夕飯より卅日の朝飯迄甘藷と共に喫食せしに三四時間を経て何れも腹痛を催ふし漸々苦痛を覚え遂嘔吐を始むるに至れり斯くてMは其日に死しKは二日目に死亡したるも他の七人は漸く蘇生するを得たりといふ

48. 明治40年3月1日 琉球新報 2面

アンドレー博士と語る（二）／久米島は旧火山

〔前略〕

博士は琉球諸島の植物採集を終りて徳之島より大島に赴く由にて同動植島の物に就て語りたり

大島は山高ければ国頭よりも植物多く大島よりも種子ヶ島屋久島又多し屋久島は山深く高くして動植物も全く他の島々と異なり大隅以南の島嶼中最も古きものなり植物は大島には蘇鉄あれど屋久島には生ぜず猿、狐、狸は屋久島に住めども大島には絶えてなし之れによりて見れば屋久島は九州本土と等しく地層年代は他の種子ヶ島大島琉球の諸島よりも古くして此等の諸島嶼は屋久島より後に出来たるものなり

[後略]

49. 明治40年4月17日 琉球新報 2面

渡名喜島の飢饉

島尻郡渡名喜島の飢饉に就きては過日の紙上に於て報したるが其後其筋の出張員実地に臨み調査したる報告によれば全島は戸数百八十四戸人口千百七十九人にして其中五十一戸は殊に貧に窮せるものにて先日来粟国島より蘇鉄を購し又は共有金二十六円を使用して口糊を凌ぎ居たるが就中十余戸は食するに道なく三度の食事さへ碌々有り附くこと能はざる有様にて取敢へず郡役所より三斗入粉米五俵及金二十六円を救助せる由

50. 明治40年6月25日 琉球新報 2面

与那国島の飢饉

昨年前後二回の暴風ありたる為め与那国島にては今年へ掛けて大に農作物の不作を來たし近年稀なる飢饉の惨状に陥り島民の困難一方ならざるより [略] 四月三日と云ふに暫く全島を難れ翌四日辛うじて目的地なる与那国島へ到着したりと云ふ夫れより二氏は早速各戸に就きて其窮状を調査し之を六級に分ちて一人に就き八合乃至三舂宛の救助米を与へたる後別項記載の如き備荒貯蓄の規約を設けたりとの事なり今回の飢饉に就いては昨年十二月頃より甘藷の欠乏を來し所蔵の米粟も消費し尽くし一月頃よりは殆んど蘇鉄も蔬菜のみを以て辛き生命を繋ぎ留めたる程にて一時は随分の困難も経たることなれど追々新麦の収穫せらるゝあり昨今に至りては甘藷も多少熟し掛れるものある上に敦れも可なり豊作あれば今に飢饉の窮苦を免れ得べしとなり

51. 明治42年3月31日 琉球新報 2面

蘇鉄葉輸出状況

本邦に於ては専ら本県及大島に産する蘇鉄葉神戸港輸出額は昨年中七百六十九万枚に達し一昨年よりは百七十三万枚を増加せり蓋し本品は造花「アーチ」の原料として其大部分は独逸に向つて輸出せられ居りしも昨年は米国に向て一時に多量の輸出を見し為め前年に比し稍増加を呈せし者とす由来独逸は植林条例の発布と同時に関税を引上げ大に自国の植材を保護し居れる由なるも同地方は氣候の寒き為温室を以て栽培せざるへからざる不便あるを以て関税引上後も依然同国に向て引取られ居る者毎年多額に計上せられ居れり而して前々年独逸に於ける関税改正の際外国商館は思惑的買進を企図せしもの多く従つて稀有の出増を告げしが爾來時々しき注文の入り來らざりしを以て内地停滞漸く加はり上半年に入りては少なくとも三千余俵の堆荷を見るに至りたり偶下半年に米国方面

より一時に多量の注文入り込みしを以て此の盛況は能く上半年に於ける減退を填補せしのみならず却て前年に比し稍増加を呈したりき品積は十五センチメートルを最短として百二十センチメートルに及び長短に由り十種に分たれ居り主産地は琉球大島たり是海外に於ける嗜好は専ら葉の密集せるものなるも本邦産中海外の嗜好に適するものは独り大島産たるのみなればなり截伐期は七月前後にして適度に乾燥を了へ順次内地へ廻送するものなるが輓近本邦に於ても染色法の稍完成せしやにて現今紫、緑、青、赤、白色に染めたるもの亦輸出せられ居るといふ因に本品は乾燥後熱に触るれば柔軟となり容易に染色し得る耳ならず冷却後は再び硬質を帯び昨年末の市価は十五センチメートル一枚二厘なりと云ふ

52. 明治42年5月21日 沖縄毎日新聞 2面

蘇鉄の培養

過日の暮れ方独り杖を携へて他郷に多年放浪しながらも猶ほ切々憧憬れたる奥武山の山容水色を眺むべく出掛けて先づ公園を一と廻りして見た成程其の見晴らしの区域は狭いが残半の生涯を送るには左程不足を感じない丈の箱庭的嫌ひはあれど其の閑雅なる風致は髓に備はつて居る、而して其の帰り掛けに城間氏の別荘(公園内)に立寄り兼ねて噂に聞いていた蘇鉄を見たが其の品の佳いことと其の数の多いことゝいつたら実に目の醒むる程で迎も外では見られない雅観であつた今試みに城間氏より聞いた蘇鉄の培養談を数寄者のために聊か書いて見やう

産地採取者及価格 佳品の産地としては豊見城村の真玉橋、志茂田兼城村の賀数、国頭村の与那、殊に中城村の奥間、上原は最も多いそうである、それで何ういふ所にあるかと云ふに大抵高い土山の麓に上から崩れて来る砂土に覆はれて圧迫されて表面に苗子の頭を出し得ないで土中に叢生密集し其の親木も疲頹瘦衰の姿で辛じて小さい葉を出しているから試みに其の根元を五六寸掘つて見ると小苗が現はれて来ることもある、さうすると此は望みあるものとして尚ほ三四尺或は五六尺位まで掘りて之を取るのである又た俗に猫株と云ふのは必ず岩山の頂上に現はれてある、山から取りて来るのは小寒から清明の頃まで、鮒や鰻の漁師が此の期間は不漁だから蘇鉄取りに転業するそうだ、劣等品は内地に輸出せられ価格は品により一定しないが最低のものが一個二銭で五六十銭以上のものになれば当地で觀賞用に供せらるゝ。其の最上品になると山出しの儘で二十円に上るものもあるそうな—

植付及手入 山から取りて来ると直ちに仮りに地植して置く、さうして夏至の期節までには大抵根が付いたか枯死したかゝ判明するが故に愈々根が付いたとすれば鉢に上げるのである又た其の生枯が不明の時には二三度□も抜き取りて見て差支へはない若し根の生じない場合には根元を切りて液汁の出ない様に之を日に乾すか又は焼金を充てゝ液汁の乾くやうにするのは甚だ必要である、蘇鉄の根の付かないのは多分液汁が浸み出す為めである而して其の土は所謂「ニービ」に限る^{ママ}

木の僻せを直ふす時期は夏至より処暑頃までの暑中で其の以外に造ると枝を折るの虞れがあるから蘇鉄愛養家は之を知りて居なければならぬ爪取りは小寒大寒の中で其の外遣つてはいけな^い蘇鉄の鉢植は必ず土を盛らす故に水は上から灑ぐと利かないから水を盆か桶に入れて之に鉢を浸して水を吸収せしむるのである水を屢々遣ると葉が伸び過ぎて甚だ見苦しくなるから鉢に発生している苔の枯れざる程度に遣れば充分と云はなければならぬ又た蘇鉄には肥料は一切入らない世間では能く蘇鉄には釘を打てば好いと云ふものもあるが若し漫りに釘を打つと枯死せしむるを免かるまい想ふ

に釘を打つのは余り蘇鉄の旺盛なる時に之を締むる一つの方法であらう

品位 其の品位の善悪は一口には言ひ難いが先づ概して云へば上部に枝かありて而も其の枝の長のを珍重する、下部の枝は外のを「クツツキ」ても一寸見分けが付かない又た枝が短いと葉が伸びて之を蔽ひ隠し何が何やら見栄がないからである上品を云へば上部の枝に子を持つものを貴ぶが其の子に孫を持つものになるとモ一滅多にはない稀有の珍品として数奇者は之を愛養して措かないそうな一

城間氏の所持品 城間氏の之を始めたのは五六年前で今日のように盛んにしたのはツイ三年以来の事である今別荘にあるのは約五百鉢位で其の価格は一体に付七十銭から五十円位するそうだが当地に売れるのは四五円以下のもので五六円以上になれば内地に輸出しなければ売口がないと云ふことである、聞けば城間氏は来る五十年に開催せらるゝ大博覧会を当込んで斯く盛んに遣つて居るとの事だが流石は城間氏で儲けながら楽しむとは何処までも抜目のない遣り口と云はなければならぬ(南香)

53. 明治43年6月13日 沖縄毎日新聞 3面

沖縄みやげ(六) 毒蛇と自然界

[前略]

元より沖縄は熱帯に近い地だから魚類は黒潮の影響で印度で見るやう珍魚が沢山ある鯨をはじめ人魚といつて昨年の東京博覧会に出品された海牛その他玳瑁に盲目蛇、飯匙蛇より恐ろしい蛭(草鞋虫の如き恰好)も少しはいる植物界では四時花を見ぬ時なく果物ではバナナ、パインアップル、パヤ、龍眼、糸瓜は長さ七尺もある名物の芋は素より蘇鉄も食用になる珈琲も出来る薬用、有毒、工業用等の熱帯植物も沢山あるまた庭を飾る榕樹、福樹の美事なのや花美しき楸木さては冬も野山を飾る三十幾種の草花には内地で見られぬものが多い(羊公)

54. 明治44年7月6日 琉球新報 2面

慶良間一斑(三) 愛鹿

[前略]

蘇鉄は山腹堤防原野等至る処に繁茂して殆ど空地はない蘇鉄は無尽□糧倉□凶年に当るもこの糧倉を開き蘇鉄の澱粉調製に忙はしいのである

客年暴風の為本県農家か常食に大恐慌を来たした時に際しても当地ではこれを以てこの打撃を蒙ることが少い然らばこれが栽植及調製は当村にては抑へるべきであるか將た奨励すべきであるかは事□なるが様にあるけれども当村□進歩発展□上には少からぬ関係を持つて居る暫く其得失を上げて見やう蘇鉄は土質地形共に悪しき所にては能く繁茂す蘇鉄は空地を利用するを得蘇鉄は特に栽植手入せずとも能く繁茂す蘇鉄は茎葉共に硬固にして風害を被らす蘇鉄の調理は婦人も能くなす蘇鉄は一般外敵の害を被る事なし蘇鉄栽植調製は資本を要せず蘇鉄は永年生植物にして保存すること易し蘇鉄を凶年に供ふるは安全なり以上は得とする所を上げたのであるが之と同時に失が伴ふのである即ち營養不良の患あり中毒の患あり調製に労力を要すること多し民度を高むる妨害となる進取の氣象を殺滅す何となれば之か調製に営々労力の過半を過し他の事業を経営する念生せず以上□得失を一概にいへば之を食するのは消極的で安全であるから天与の糧食をたのんで進で高尚なる生活をなし積極的に事業を経営する精神を殺く大なる不利が生ずるのであるだから成るべく之が調製を抑

へ其労力を他に転じて生産物の増加を計りて民力を養成せねばならん

民力増せば思想も高尚になる思想高尚になれば高尚なる生活を好む生活高尚なれば凶年に際しても蘇鉄を以て常食に充てず即ち米を供ふ準備をなす之が準備をなすには産業を興し生産物の販売をなさねばならないから自ら改良することが出来る近年村民も之に着眼して大いに水産業を興して利益を納めつゝあるのであるから近き将来に於て民力充実せる豊かな村になるであらう

55. 明治44年7月11日 琉球新報 2面

慶良間一斑(六) 愛鹿

[前略]

豚は肥満畜として生産するを目的として居るが飼養法は他地方と異つた所は無い只凶年に際して飼料か乏しい時に蘇鉄の上皮を給して居るのは実に善い利用法で之□豚の飼料になるとは世人の思ひ及ばざる処であらう

[後略]

56. 明治45年7月27日 琉球新報 3面

蘇鉄を食て中毒/▽二名は死し一名は重症

赤目張魚を食て人命を傷ひしは近頃よく聞く話になるが之は又蘇鉄を食て中毒し家族六名中二名は死亡し一名は重傷□陥りたる椿事出来せり国頭郡国頭村字奥間小字柳原◇◇◇J Sは二十日夜友人A某外二名を自宅に招き蘇鉄の粉にクチナギーと称する魚の雑煮を馳走し酒宴を開きしが程経て友人等が帰りたる後該雑煮の残物はS長男S次男N(九つ)三男U(六つ)外家族三人にて食ひたるに二十一日午前五時頃に至るや右三人俄かに腹痛を起し苦悶の状態なるより父Sは大に驚き村医を呼んで診せしに蘇鉄の中毒と判明し直ちに解毒の手を尽せども甲斐なくK及Uは全日午前九時遂□死亡し長男Sは重症にして今の所生命覚束しとのことなり

57. 明治45年7月30日 琉球新報 3面

蘇鉄中毒者遂に死す

国頭郡奥間村字桃原◇◇◇S長男J S(一二)[略]は一命覚束なき旨去る二十七日紙上に報道せしが二十四日午前九時も遂に死亡したりと云ふ

58. 大正元年8月11日5面 琉球新報

又もや蘇鉄の中毒/▽夫妻共に死す

国頭郡大宜味村字根路銘◇◇◇番地MNは過日朝飯の膳□米に蘇鉄の粉を混合して粥を焚き夫B(四三)長男H(一四)同居人T Jの三名と共に食したるが翌午前十一時頃Nは中毒を起して頻りに吐瀉を続け朝稻村医来診せし時よりは人事不省に陥りて手の付け様なく少時にして死亡□他三名も同様中毒を起して治療中なりしがBは数日の后死亡しH及Jは目下治療中にて少々軽症なりと云ふ

59. 大正2年3月1日 琉球新報 3面

半年間の中毒者

本県に於ける昨年七月より十二月迄で六ヶ月間の中毒患者は十一名中毒死亡者七名なり是れを品名別にすればリゾートの中毒患者一名鰻中毒患者二名タマンナ及び「キン蟹」中毒患者一名全死亡者一名蘇鉄中毒患者五名全死亡五名格魯児石灰中毒患者一名海月中毒患者一名全死亡一名なりと

60. 大正2年8月4日 沖縄毎日新聞 2面

『琉球諸島』(一) 月城抄訳

琉球諸島瞥見記

[前略]

[略] 沖縄島の方は旅客をしてオハヨウ州か又は静穏なる大英国の光景にでも接したような思あらしむ。軟かにして繁れる小山はあらゆる方面に見られる。あちこちに、大きい棕櫚がその太きい頭をのせて立つて居る。書家ターナーを歓喜させさうな巨大なる松はその枝をひろげて高く天に押し、恰もレバーン山の檜の木を見るような感を起させる。芭蕉の木の林、又は濃紫の蘇鉄の森もそこには見られる。[略]

[後略]

61. 大正3年3月19日 琉球新報 1面

博物学上より見たる琉球(三) 黒岩恒氏

[前略]

次に琉球列島の全部に共通なる植物につき其一二を挙んに第一琉球松は北鹿児島県の大島諸島より南は台湾に近き沖縄県の与那国島に至る迄土地の高低を選ばず海中の列岩或は浪打際より山巔に至る迄生ぜざる処なし(但し一千尺以上の区には甚少し)と雖も本種は基隆に來れば最早其の跡を絶ち別種の松樹と交代せり余が見聞の範囲に於ては貴地種の松樹は沿岸地に少し琉球松は貴地造林樹種として多少の価値あるべきを信ずるものなり只此の種の松材が建築器具材として白蟻の攻撃に堪へざるは遺憾の点なりとす又琉球弧島に通有なる蘇鉄の如きも八重山列島にて全く其の踪跡を暗まし社寮島以南は其の身代りとも見るべき糠椰となつて居る [略]

62. 大正3年6月24日 琉球新報 3面

飛耳張目

蘇鉄の実が万病の薬となると云ふので昨今東京では中々高価に売捌かれて居るとは耳寄の話た勿論医学上何等の研究を経た訳でもないから学問的にその効力は説明せられぬのだが実験者は何れもその奇効に愕いて居るさうだ△蘇鉄は南洋の産で本県以南に多い東京大阪では何れも之れを南洋から取寄せて居るが其値段は至つて安いもので果実一個五厘乃至一錢であるが昨今万病に効があるといつて以来一個十錢位いで売れるので非常な利益を占めて居る商人が少くない△此果実を買求めて二つに割り水二合の中へ入れて煎じ詰め一合位に詰めたのを一回の分量として一日三回食前に用ゆるのださうだ△十日間も用ゆれば胃病も脳病も呼吸器病もレウマチスも肺病も子宮病も癒ると云ふのだが不思議だ△利に敏い商人は早くも「蘇鉄煎」と云ふ売薬をも発売したそうである斯うなると有難い本県は至る所蘇鉄だから其の実が万病の薬とあつてドシドシ売れるやうになつたらウンと

儲かるのは勿論本島の物産を一つ増加した訳だ

63. 大正3年8月30日 琉球新報 3面

蘇鉄に中毒して▽乳呑子を残して一家全滅

国頭郡羽地村字饒平名◇◇◇平民農TK(三五)同人妻N(三二)長男K(一一)長女M(五つ)及び同字◇◇平民農NS(四七)の五名が蘇鉄の中毒にて死亡したる^{ちんじ}椿事あり同人等は去る廿一日午前七時三十分前記K方に於て蘇鉄に米を混ぜたる雑炊を一家打揃ひ朝飯を食ひ居たる所へ前記Nも^{みち}畑へ出る途すから立寄り一緒に右の雑炊を食ひK夫妻と打連れ^{ちんじ}仕仕事に出でたるに午後まで何の異状もなかりしに午後四時頃家にありし長男Kが腹痛にて苦み出し同六時長女Mも又同しく激しき腹痛起り共に苦悶し居りしよりK夫妻は其の看護をなせし所八時頃に至り兩人も又腹痛し出したるに愈々中毒と判りたるも遂に治療の効なく廿二日午前一時より午前八時迄に一家相續いて死亡し朝飯を突合たるNSも当日午後四時より中毒の状を呈し同日七時遂に死亡せり猶K一家は本年五月生れの次男Kのみ生残り一家全滅の惨劇となりし□由

飛耳張目

国頭郡の羽地村字饒平名に蘇鉄を食つて中毒し今年生れの乳呑児一人を残して一家全滅と云ふ惨劇がある△而して相伴に預つた隣の者までが中毒してこれ又落命とは気の毒な話である△蘇鉄の中毒は従来^{しば}屢々あることだが何しろ今の羽地村のは近頃の^{ちんじ}椿事である△同所は同村でも極く^{へんび}辺鄙な離島で^{みん}民度も甚だ低く蘇鉄などを食つて僅かに^{みぢめ}飢を凌ぐと云ふ惨目な生活状態にあるのは是非もないことだが△一般に国頭地方では飢饉の際に限らず平素でも能く蘇鉄を食ふ所だから注意しなくてはならぬ△蘇鉄は中の心を採つて澱粉に製して食ふのだが蘇鉄と云ふと△この前内地で蘇鉄の実が万病の薬だと云つて発売したさうだが△素性の知れぬ^ろ霊葉はウツカリ出来ぬものでこの程名古屋で沖縄県産出の蘇鉄の実は天然の^ろ霊葉なりと^ま触出して発売した者があつたが△^{ろうまちす}儂麻質斯を患つて久しく苦しんでいた或る下駄屋の下女が三個十銭で買つて煎じて飲んだ所△炊事中突然眩暈を感じ「薬屋に殺された」と叫んでドツと打倒れて人事不省になつたと△同地の新聞にあつたが^{げんうん}矢張これも蘇鉄の中毒だから恐ろしくなる

64. 大正3年9月18日 琉球新報 2面

粟国事情

最近全地より帰来せる人の談に依れば各離島風害の爲め食糧に窮しているけれども本島は甘藷の収穫平年に劣らざる様なれば差支なかるべし且つ原野は見渡す限り蘇鉄にて実の収穫七十余石に上ると云ふ^マ鰹船は暴風の爲に破損し目下渡久地の帆船一隻滞留し相当の漁獲あり本島は^マ漁揚に近きを以て帆船を用ふるの便あれば将来鰹業は最も有望なるべし粟国島人は那覇辺にては盜癖ある如く云へども其実際は之に反し却つて那覇在住者の所行正しからざる者は大に排斥する由されば島内にては警察事項至つて少し唯だ飲酒の悪しき様なり

65. 大正3年9月24日 琉球新報 2面

八重山の暴風被害

昨日入港の広運丸便にて来覇せる大濱用要氏の談に依れば今年八重山に襲来せる暴風は前後八回

に涉り殊に最後の暴風は五十年以来の大暴風にて之れが為めに一般農作物の被害甚だしく島民の常食たる甘藷の如き八回の暴風雨にて全口吹き枯され昨今に至りては農民すら自作の甘藷を以て一度の食量をさへ満足に採り得ざる有様にて多くは外米に依り生活を続け居れるが貧困者に至りては蘇鉄を食し居れり殊に戦乱に依る米穀類其他日用品の騰貴と加ふるに阿旦葉素製原料の不景気なる為め一層生活の困難を来し従つて金融甚だしく切迫し民間貸借の如きは小口にて四五割を普通とせる模様にて甘藷の如きも被害甚だしければ今明両年間は島民の生活も随分困難ならしむと云ふ

66. 大正3年11月7日 琉球新報 2面

宮古通信／▽伊良部より

〔前略〕

暴風被害 過日國仲村長は吏員岸本、前泊、儀間三人を引率して他三村暴風被害視察をされたり其談に依れば三村は其惨状見るに忍びず戦慄せしむる者ありと当村に於ては七十余棟倒壊し両校破損等にて乞食数人を出せり蘇鉄を食するまでならざれども低廉なる阿旦葉工賃にて粉米を買求め辛うじて露命をつなぎつゝあり然も之にては宮古郡内にて生活上位なる由他村の困苦推して知るべし目下他よりの浮浪者窃盜の恐あるに付夜警組を造りて巡回せしめつゝあり

〔後略〕

67. 大正3年12月2日 琉球新報 3面

伊良部通信

本村の暴風被害状態は他よりは少しと雖而も住民の困苦甚だしく候五ヶ字は夏より冬にかけては専ら阿旦葉と甘藷とに生活の基を置きしも本年は戦乱その他の為阿旦葉採取の途絶え収入は減じ加之暴風の為め甘藷甘藷その他五穀農作物の被害多く西区は人民の比較的貯蓄心ありて甚だしからざれども東区に至りては蘇鉄を食する者多く有之候

佐良浜は海産物の収入多額なる為め他所よりは容易に暮し向き宜しきも他三村の饑饉状態に至りては言ふに忍びざるものあり

〔後略〕

68. 大正3年12月15日 琉球新報 2面

粟国だより

〔前略〕

渡名喜島等の饑饉は想像も及ばざる程にて粟国へ蘇鉄買ひに来るグリ船鯉船は従来頻々なり久米島慶良間も饑饉の模様なれど本島は差したる異状なく人民は健かに活動し居れり(碧响)

69. 大正4年2月16日 琉球新報 2面

渡名喜島の惨状／一千の島民饑に泣く

島尻郡渡名喜村は昨年六月より九月迄の前後八回の暴風の為め農作物を荒されたる結果全島不作となり為めに食料は皆無の有様島民今や饑餓に迫り餓孚野に治しと云ふ惨状を呈したり先に島尻郡役所にては城山書記を被害地視察の為派遣し旁々一時の救助として芋潭六俵を送り罹災民に給与す

る所ありありたり今

被害状況を報道すれば大要左の如きものなり [略]

島の人口は現在千三百五六十人あり男子は漁業を主とし女子は農耕に従事し居たるも食糧食窮乏の爲め衛養不良となりて労働も不可能となりたるを以て其の惨状殆んど言語に絶する許なり二三年前迄は芋の好作の爲め島民は其の残額をば慶良間久米島等に移出したりしを以て今回の饑饉に際しても食料の儲蔵品としては絶無の有様となれり災余の芋と云へば直径七八分のが大なれどもこれとても普通人の口にすべからざる粗味なるを島民は其れさへ得難しとして珍賞する次第なれば従来県下に於て犯罪皆無と呼ばれし島民も茲に至りては我慢も出来ず始めて盗心を生じ夜間他人の畑を犯して芋の窃取を企つる者頻出すと云ふは歎はしき事と云ふべし然らば芋の外に彼等の食糧に宛べき者は何かと云ふに今は全く蘇鉄の外喫する物なきの状なり同島には蘇鉄もあれど能く繁殖せず品質も著しく劣れるを以て蘇鉄は目下粟国より仕入れつゝあり本月上旬頃迄の仕入高が四千八百斤と云ふ尤も蘇鉄の斤量は三十三斤にて一斤とするを以て一万五千八百四十斤となる是れが島民の唯一の食糧として今日までの生命を維ぐ資料となれり蘇鉄は其の心の乾燥した者を碎末にして粥にした者を喫すれど之れを食膳に上す迄には約十七日間を要するを以て昨今の如き雨天続きにては乾燥不可能なれば従つて手数に困難を来し未熟の儘喫し去るに於ては中毒の恐れあり甚しく危険なり現に

蘇鉄中毒に悩む者も多々見受けたりと云ふ猶蘇鉄の赤実が罹災民の上等食として粥に雑せて喫せらるゝが开は島民中富裕階級の能くするのみ食物に於ける島民の戸別は蘇鉄を食せずして米其他の物を用ふる者が全島にて四戸あり教員医者巡查の類なり小米に粟蘇鉄を雑せて食する者が村長以下四五戸あり二三日置き位に一度芋を食する者が二三戸蘇鉄粥に実を雑ぜる者が三十三戸他は皆蘇鉄許を喫しそれさへも食い敢へず蘇鉄ほくりを用ふるに至る一月中旬細民救護の寄附金を募りしが総額三十六円七十五銭其割当が一円以下十銭以上にて十銭の口が多かりきこの寄附金にて蘇鉄を仕入れたるが浜より蘇鉄を運搬するに際し十八九歳の青年にして四十斤の蘇鉄を運ぶの力なしと云ふは全く營養不良の結果なりと [略]

[後略]

70. 大正4年2月16日 琉球新報 3面

蘇鉄の実と売薬商

蘇鉄の実が目下京阪地方に於て薬種として販売せられつゝある事は屢々聞く所なるが京都府竹野郡鳥取村薬種及び売薬業宇野菊藏は此程島尻郡を蘇鉄の生産地なりと聞き同郡役所に蘇鉄実の購入方につき照会し来りたるが同人は昨年も二百円買込たるが本年は之れを拡張して三百円許買込の計画にて上等普通備品の価格上が一升(百十粒)十六銭五厘普通が一升八銭五厘の値にて仕入れんと云へり因に上等品は一粒撰にして皮剥け又は上皮赤色の部分等に腐れなきもの普通は多少皮の剥たるものにて可又赤皮の部分多少の腐れある物等を混入せる物なりと

71. 大正4年2月22日 琉球新報 3面

寄合話(廿六)

照屋林顯 渡名喜島の饑饉視察の爲め一昨日龍宮丸便より出張せし水産理事照屋林顯氏が昨朝全じ龍宮丸便より帰郷せしを聞き記者は同氏を水産組合に訪ひ全島の飢饉状況を聞きたり氏は語つて

「私は一昨日午前八時出帆の龍宮丸で視察一行と行きましたが途中石山丸の坐礁したを救助したりなんかしたため漸く九時に出帆して全日の午後四時には渡名喜島に着きました [略] 島民が現に食つて居る蘇鉄を持つて帰りましたが上等のものが普通本島の農民が食ふものでそれを食ふ人民は極僅少であります其から中位の者が食ふのは充分に乾燥されて居ませんから黴が生えて稍々もすると是れは中毒をするのです下等のものになりますとお話になりませんポロポロになつたもので虫もついている位のもので是れなんかもうつかりすると中毒します是れを食ふには如何して食ふかと申しますと此の蘇鉄の茎を削つて乾したものを更に水に湿して挽くのですするとどろどろになりますからそれを硬めて煮て食ふのです私が行つた日は旧暦の七日の節句でしたから民家も稍々煙か立登つて居ました然し其煮て居るのを見ますと種々の草の葉をごたまぜにして食てるぢやありませんか実に悲惨な有様です

72. 大正4年2月24日 琉球新報 2面

渡名喜島現況／一千の島民飢に泣く／回復期は五十日後

渡名喜島の饑饉に付きては再三報道し置きたるが本社は態々記者を派遣して親しく実況の視察を試みしに

[中略]

今回饑饉の原因は本紙にて屢々報道せる通り昨年七八回の暴風雨の爲め農作物一切を枯死せしめたるが爲めにて昨年十月頃迄は四五月植えの甘藷あり格別食糧の欠乏を告げざりしも其後害虫生じたる爲め十一月に入り甘藷を初め他の作物殆ど全部枯死して俄かに食糧絶え島民は狼狽して家畜を売却し粟国より蘇鉄を購入し来りて僅かに飢えを凌ぎて今日に至りしも今や全く蘇鉄を買ふの資力も尽き暴風後直ちに甘藷の植え付けを爲せるも今日未だ小指大程の成長に止り食糧と爲らず全島に蘇鉄は繁殖せるも燃料として濫伐せる爲め食料となる可きものなく麦及び大豆の如き作物も全部枯死して味噌も製する能はず島民殆ど全て海水を沸して僅かに塩分を取りつゝある状態にて全く食ふに物なく唯成り行きの運命に任すの悲境に陥りつゝあり

[中略]

右最困難の二十二戸に対しては県及び郡役所水産業者其他の人々の救助せるものを配り昨日より向ふ十五日間位の食糧は支え得べき見込なるが饑饉に迫れるは殆ど全戸にて旧三月に至らざれば芋蘇鉄も収穫し能はず全人口千三百四十二人の内千五十四人は全く食糧絶無の姿なり

而して是等千余の窮民に向ふ三月迄九十日間救助するとせば左記の如き計算となる

一日一人の食糧芋粕四合に蘇鉄八合を給すとすれば一人の食費は一日四錢七厘として千五十四人分一日の食費四十九圓五十三錢八厘五十日分は二千四百七十六圓九十錢と爲る

唐米一合一錢七厘代の米を給とし一人一日の食料六合とすれば一人の食費十錢二厘にて千五十四人の一日の食費百七圓五十錢八厘五十日分の食費五千三百七十五圓四十錢と爲る

73. 大正4年2月25日 琉球新報 2面

饑饉彙報

渡名喜島の現況に就きては昨紙報道し置きたるが更に記者の手帖に控え□儘を左に報道せん

蘇鉄購入高 去年十一月以降全島民は粟国より蘇鉄を購入して食糧に充てつゝある事は屢々報道

せし通りなるが十一月より一月末迄の蘇鉄購入高十五万八千四百斤にて初めの程三十三斤に付き七銭相場なりしが目下は八銭五厘と為り旧年末の如きは十斤買ふに酒五合を呉れざれば売らずと意外に粟国人が強硬に構へてより此頃は蘇鉄買ふさへ不自由と云ふ有様なり

芋の味を忘る 全戸数二百二十戸の内米許りを常食とせる者は僅々教員巡查医者等の二三戸に過ぎず是等は皆首里及び那覇人にて他は尽く蘇鉄を食し居り村長以下僅々五六戸は漸く小米や粟に蘇鉄を交て食し居るが芋皆無となり三四ヶ月を経たる今日島民は全く芋の味を忘れ幾ら食するも蘇鉄は腹堪えなければ一日空腹の思ひありと

[中略]

芋は長浜種 全島地味は格別瘠地と云ふ程に非らず先づ中位に属し芋の如きも繁殖宜く特に長浜種全地に最も適し全島凡て長浜植えて食糧は余る程にて年々慶良間や粟国に移出し来れるを五六年間豊年続きし為め農民太平に慣れて貯畜^{ママ}を怠り来り今日に至一切の作物不作と為りし結果俄かに狼狽を極めたるが目下の窮状は天災の為めなりとは云へ一面人事を尽し得ざりし恨みもある也

74. 大正4年3月3日 琉球新報 2面

琉球饑饉史 (六) 麥門冬

尚敬王時代 約百八十年前

尚敬王は正徳三年癸巳(西暦一七一三)尚益王に継て王位に即かれたこの王の時代は琉球で文化の最も燦然たる時代である人才所々に輩出し百花綯を争ひ艶を誇るの盛観を呈した時であるが其の即位前後の年は打続きて凶荒であつたので挙国の疲弊甚しかつたソコで享保九年壬寅(西暦一七二二)薩摩から田地の測量を行はるゝことゝなつたが事情を陳じて其の延期を求め遂に之れを許されたことがある [略] 享保十年乙巳翌十一年丙午の兩年にも続いて饑饉があつた其時国頭郡奥邑の宮城神里両名が蘇鉄を以て饑饉を防いだと云ふ功に依り黄冠を頂戴することがある「国頭郡奥邑金城小禄ともに辺戸邑に往き鉄樹を取り来りて以て奥邑に植えて以て飲食の欠を補ふ其の男宮城神里等父志を追継して克く心力を竭し鉄樹を培養し已に蕃衍を致す康熙巳丑の年大に餓え人民餓孚あり雍正乙己丙午年間五穀登らず民亦た食を失ふ彼の二名元のまゝ鉄樹を斫取て国頭大宜味郡並に久志郡川田平良邑、恩納郡安富祖名嘉真邑に給発して以て賑救を為す此年(享保十四年巳酉)に至り鉄樹の種を發して国頭府九郡に分給して預め荒凶の用に供す」と云ふのであるこの二人の如きは真に賞するに足る特志家である如何に饑饉か天災なりとて人力を以て其の害力を緩和し若くは之れに打勝つて行かれないものでもない之れを為すには不断の用意がなけねばならぬ此の二人者の古人の如きは勤儉貯蓄の模範的人物である而してこの殊勝なる心掛は其の親達から伝承して来た所が面白い農家にはすべて歴史がなければならぬ好果は好木となり長成して更に好果を結ぶのである其れから七年後元文元年丙辰(西暦一七三六)に政府は儲蓄倉と云ふのを創建した「本国素救荒の儲あり或は広福門の左右に貯在し或は各蔵庫に借積すれども未だ曾て一定の庫あらず是年に至り始めて儲蓄蔵を建て在米一千五百石を積毎年其の積米の一半を將て新米に輪換して朽爛せざらしめ以て荒年の済に備ふ」とある多分蔡温などの考であつたのだらう蔡温は享保十三年戊申(西暦一七二八)法司に任じ国師の職を兼務したのである

75. 大正4年3月9日 琉球新報 2面

琉球饑饉史 (十二) 麥門冬

尚穆王時代 (承前) 約百三十年前

球陽には天明乙巳の饑饉の状を述べて曰く「乙巳の年本国大に饑ゆ万民困窮既に倉廩を発して救助すれども而も粟米足らず此れに因りて國中及び各島に行りて凡そ錢穀を有する者は奉借して以て国用に備へしむ又飛船を遣はして太平八重両山に致し需を告ぐ各人皆思ふ今次一統大に饑ゆ然り而して今聚採して以て国用を補ふ是亦た一時の奉公なり」と以て其の時の饑饉の状を察すべし例の儲蓄倉の粟米を發したが其れでも足らぬと云ふので國中離島迄も有志の奉借を募つた所が是れ亦一時の御奉公□あると其の募集に応ずる人が極めて多かつた [略] 是等の人々は孰れも翌々年の天明七年恩賞に預つたのである同年の四月十二日渡名喜島の蒲戸比嘉と加那比嘉なる兩名の者の善行を褒賞したことがある時節柄として書いて見る

渡名喜の饑饉

渡名喜島が近年稼穡熟らず加之に痢病が流行して島中の貧困者一百四十九人と云ふ者は食に窮し且つ病に罹つて療養もなす能はざるを蒲戸比嘉と加那比嘉の兄弟が無利息で米二石五斗粟三石六斗を借し豊年の時に償還せしめることにし又蘇鉄三万二千斤は無代価で給与したので窮民は漸くに命を助かつたと云ふことである又樽比嘉、真佐比嘉、蒲戸渡口と云ふ三名の者が借錢の多い為めに困つて居た所を二千百貫文無利で貸して負債を償却せしめたと云ふのである [略] 斯う云ふ例は沢山あるが唯渡名喜島の人であるから同島目下饑饉の場合特に引用した訳である

76. 大正4年3月11日 琉球新報 2面

琉球饑饉史 (十四) 麥門冬

尚灑王時代 (下) 約九十年前

饑饉が打続くので農村は益々疲弊する文政九年より天保五年迄九年間に於て下知役を建て、監督保護された地方は美里郡、西原郡、具志頭郡、知念郡 (三び) 宜野湾郡、大里郡、東風平郡 (再び) 中城郡 (再び) 久志郡等であつた文政十年 (西曆一八二七) 渡名喜の下知役は解かれた文政元年から本年迄十年間欽允泰慶田筑登之親雲上喜本が下知役を勤め其の指揮監督の功に依つて挽回したからである或は銅錢を借して船隻を製造せしめ或は不毛の閑地に蘇鉄を栽植して凶荒に備ふる事又は桑の木を植えて養蚕を奨励する等色々やつたらしい [略]

77. 大正4年3月12日 琉球新報 2面

琉球饑饉史 (十四) 麥門冬

尚育王時代 約八十年前

下りて尚育王の時代となつた王の即位は天保六年 (西曆一八三五) である其の翌天保七年には五月から七月迄雨が降らないとて雨を祈つた [略] 当時専ら用いられた蘇鉄の解毒法を述べやうこれは安永二年癸巳前川親雲上なる人の久米村の惣役長史に送つた公文の中にある曰く

一、蘇鉄の毒に当り候は、早速粟から焼候而あく水取り上夫にすまし右あく水に而粟粥焼相用得申候

附 粟から水不有合時はさ、水わらのあくたにても相済申候

一、右あく水に黒砂糖入不斷相用得申候

附 病人望次第湯又は冷にても相済申候

右は去亥年伊良波怨伯久米島滞在の砌男女七人蘇鉄の毒に当り其内一人男子五十余歳之者別而強
当り十死一生之際及候処右療治方前字栄城親雲上より腰書の通り致伝授養生仕候処何れも無別条本
復仕候由而怨伯申出趣有之候間此間中得其意候様久米村中不洩可被申渡旨差図而候以上

乾隆三十八年癸巳

二月十二日 前川親雲上

惣役 長史

78. 大正6年6月22日 琉球新報 3面

蘇鉄中毒／二人は死亡し／七人は苦悶す

島尻郡伊平屋村字後島に蘇鉄を食して一家隣人九人中毒し中二人は死亡したる椿事あり其詳報を
記さんに全島にては甘藷欠乏に次ぐ米価騰貴の爲め島民は蘇鉄を食し居る状態なるが去る七日字島
尻◇番地 T T (三八) 妻 N (三九) 長男 T (十四) 次男 T (八つ) 妹 K (二〇) 養女 N K (一二)
及び隣家の N U、H Y、N M の九人が T 方にて朝飯として蘇鉄の雑炊を喫し M 養女 K の二人は登
校し他は仕事に就きたるに K は学校にて授業中に腹痛を催し苦悶し居るにぞ教員等も騒ぎて種々手
当てを施せしも痛みは益々募るのみなれば自宅に連れ行き看護を爲し居る際 T も腹痛を催して帰
宅し一時間後に死亡し続いて K も死亡せり猶ほ N、T の二人も吐瀉を催して苦悶を始めたるより初
めて蘇鉄の中毒なる事判明せり他の五名も続々帰宅して苦悶を始めたるが医師なき僻地は施すべき
術もなく字中は唯だ上へ下への大騒ぎをなしたるが七名は其後経過良好にて漸く生命を取止めたり、
猶ほ蘇鉄の洗ひ汁を喰はしたる豚と残飯を喰ひたる猫も変死せり因に村有志は今後の参考として残
飯を其筋へ送り試験を乞ひたりと (伊平屋通信)

79. 大正7年1月15日 琉球新報 3面

伊平屋の饑饉／◇島民甘藷の欠乏に苦む

島尻郡伊平屋島は昨年四月中旬より八月^マ上月に掛けて早魃相続きたる爲めに島民は常食に供する
甘藷作付の機会を失ひ前途を憂慮し居たるが八月中旬に至り辛も降雨を見たるより島民一同初めて
愁眉を開き

小躍りして蔓の植付をなしたるも不運は何処迄も続き多くの島民が待ちに待ち兼ね後の収穫を
楽しみに植え付けたる蔓は去九月、十月の両度の暴風に悉皆吹き枯らされたる結果先月下旬より勃々
甘藷の欠乏を来したるが本月に入りて益々烈しくなり昨今では全く

饑饉に陥り中流以上の家庭で一食は藪食他の二食は藪粕蘇鉄蔓の業等色々のものを取り交ぜた
る雑炊を食し居る状態なれば猶ほ細民になると前記の如き雑炊の二食位にて僅に凌ぎ居る悲惨な有
様なりと而して島民の大部分は未だ製りもせざる

[後略]

80. 大正7年1月16日 琉球新報 2面

琉球みやげ (七) 漁翁

糸満へ行く途中那覇の町端から二十町計り行た所に小禄村と云ふのが此処が琉球飛白即薩

摩飛白の本場で此街道の両側は甘藷と甘蔗とが一番多く田には稲もあるが三角藪もある三角藪は所謂琉球と云ふ畳表になることは誰も承知の事夫に蘇鉄が沢山に植えられて居るが蘇鉄は葉をたき物とし実からは澱粉を取ると云ふことである。[略]

81. 大正7年2月21日 琉球新報 3面

甘藷欠乏の悲劇 / = 蘇鉄を食つて死す

島尻郡具志川村字大田◇◇◇番地平民農業AM(三五)一家は芋欠乏の爲め不足を蘇鉄にて補ふべく去る一月二十二日居村字小港原と称する原野より蘇鉄を採取し夫れを醗酵せしめたる上雑炊を拵へ去る二月十五日の朝食としてM妻K(二七)二男E(七つ)の三人にて食したるに三人共中毒し自宅表座敷にて北頭にして仰向きとなりMは翌十六日午前八時Kは全午後五時Eも同時死亡せるを近所の人々が発見し字区長の届出に依り駐在巡査出張検死を遂げたり尚ほ長男E(一一)は学校が遅れる爲め十五日には朝食を食せず登校したる爲めこの難を避けたるは不幸中の幸と云ふべし

82. 大正7年2月23日 琉球新報 3面

本県で最も適当な副業(一) / * 県当局の調査せる物は十五 *

本県副業奨励に就いては常に識者間の問題となつて居る所であるが昨日も県会議事堂で県当局と各郡区の農業技手との協議会が開かれて相互に意見を交換する所があつた [略]

[中略]

◇澱粉製造 は最も必要で澱粉は甘藷、小麦、蘇鉄等から製造するが殊に近年は「アロールト」及「タピオカ」と云ふ植物から盛に製造している宮城農学長の話に依ると「アロールト」は澱粉製造には甚だよろしく其含有量は約二十五プロセントであるそうな即ち百斤から二十五斤澱粉が取れる訳である、今後は此種の植物を栽培して大いに澱粉を製造すべきである(未完)

83. 大正9年8月7日 沖縄時事新報 2面

天然記念物調査 / 中野理学博士来県

本県に於ける天然記念物(植物)調査の爲め第七高等学校教授理学博士中野治房氏昨日入港の便船にて来県したるが調査日割は左の如くなり

- 六日 那覇首里附近、崇元寺(蘇鉄、赤木梯梧)
- 七日 名護 屋我地島ヒル木
- 八日 名護へゴ
- 九日 普天間の松、西原村古巴提樹、佐敷海岸の阿旦葉
- 十日 那覇附近、灯台附近の蘇鉄、糸満

84. [大正10年3月8日] □面 [沖縄タイムス]

三年余も研究して漸く見届けた「蘇鉄の毒」 / 鹿島高農教授吉村博士 / 泰西の学説を否定

鹿兒島高等農林学校教授農学博士吉村清尚氏が予て蘇鉄に含まれて居る毒に就きて研究中であつたが十日程前に其毒の正体を発見して近く文部省に報告する運びになつた、博士は之に関して語りて曰く「蘇鉄の実に毒がある事は昔から云ひ傳へられて居るし實際は又毒は含まれて居るが

如何なる毒であるかは未だ見極められて居なかつた、尤も和蘭の学者が南洋の蘇鉄に就いて研究

し其の糖原質が有毒だと決定して居るが私は蘇鉄の毒は決して此糖原質でないと断定しました、即ち蘇鉄の実には糖原質があるかないかは別として譬之れが含まれて居ても其の毒にはならないのである、私は此の研究に就いて種々なものを

見付けたがアル、カロイドの内トリゴネリン、コリン、アデニン、ヒスチジン等が含まれて居る事も分つたが之等は極めて少量だから有毒とも認められないが十日位前にフトした事から蘇鉄の実にはフオルムアルデヒドが含まれて居ることを発見した、之れこそ此の実が有毒な所以である、仍て早速此の毒を兎と鱒とに試みた所両方共直死んだ、此の毒は消毒剤で目や鼻に近づければ非常に痛みを覚える、飲めば

吐瀉して死ぬる胃を激しく刺戟するのだ、嘗て私は熊本のある所では蘇鉄の実を胃腸の薬と称して盛んに売出して居るのを見たが消毒薬だから胃腸の掃除には利くのかも知れない、兎に角之れで三年余も私の頭を痛めた蘇鉄の研究も一段落を告げた、今年になつてから使つた蘇鉄の実だけでも一石以上に達するから総ては大分使つたらう」云々

85. 昭和2年7月9日□面 沖縄タイムス

県衛生課で……蘇鉄の毒素を研究／鹿児島高等農林の吉村博士の指導を受けて

県内各地の農村では頻々として蘇鉄に中毒し絶命するものが多く実に蘇鉄地獄そのものを物語つて居る最近では当時報導した去る六月十七日島尻郡伊平屋村字伊是名◇◇◇◇番地N Sの家族三名が枕を並べて絶命した事もその実例であるが県衛生課当局に於て県民保健上由々敷問題だと云ふ処から□□蘇鉄の中毒者を未然に防止すべく蘇鉄の研究家として知られて居る鹿児島高等農林学校長の農学博士吉村清尚氏の指導を受け蘇鉄の毒素を化学的に分析し近くその結果を極めて具体的に一般に発表する事になつているがそれに就いて村上技師は次の通り語つた

本県は蘇鉄に中毒し死ぬものが多い様である、これは実に県の衛生保健上由々敷問題であると思ふ、最近では伊平屋村で家族三名絶命した悲惨事があつた、そこで県としてはこれをそのまま目殺するには忍びない事であるどうかして蘇鉄の中毒を防ぎたいと考へて居た処で伊平屋の方からも喰つて死んだと云ふ蘇鉄を送つて来たから今度吉村博士の指導の下に分析し研究したいと思つているが吉村博士の研究された予備試験として実に面白い事をやられている様である

一、蘇鉄種実の殻皮を取つたまゝモルモットに食はせた処が少しく食つたのに拘はらずそのモルモットは翌日から非常に衰弱し四日目になつて死亡した

二、蘇鉄の種実の殻皮を取りそれを砕いた後、更に冷水に混合した半透明の溶液をモルモットに飲ましたら

四、五、時間余して異状を呈し遂に死亡した

と云ふ事であるが此の二例によつて見ても蘇鉄の毒素は冷水に溶解するものであると云ふ事が略判明して来たのであるが蘇鉄を食ふには先づ第一にそれをマ水で数回に洗つたり水に二三日間位漬充分毒素がなくなつたと思つた頃に食つたら中毒する様な事はなからうかとも思はれる、充分研究した上具体的に発表する心組である

86. [昭和2年7月9日] □面 [沖縄タイムス]

薬用や滋養に富む蘇鉄の研究／吉村博士近く発表

鹿児島高等農林学校長吉村清尚氏は多年蘇鉄に関する研究を為し同校演習林の佐多岬はいふ迄もなく宮崎県都井崎、指宿郡山川村竹山の自然生蘇鉄の山をも既に幾回となく実地踏査を行ひ以後苦

心惨澹研究に研究を重ねて来たが此外国に絶無の(南洋のも種類を異にす)日本特有の蘇鉄は吉村校長の研究中突止めた処によると薬用滋養にも富み其他各種の利用に利くといふものである校長は同研究に就き目下整理中なので近く著述として発表する筈だそうだよいよ発刊の上は権威ある研究として学会の注目を惹くであろう

87. 昭和2年10月13日 沖縄朝日新聞 2面

蘇鉄地獄の食料(一) 太田潮東

[前略]

二

本県の山野は到る処蘇鉄がうまつて居る、これはどんな土地にも生へるし暴風や早魃にもよく堪へるから利用さい出来れば風旱害の多い本県には持て来いだ、それで藩政時代には備荒貯蓄の意味で奨励したやうだ

史に徴するに、尚敬王の十七年(享保年間)に国頭村奥の人宮城といふ者と神里といふ者の二人が辺戸から蘇鉄の種子を取つて来て自分の村に植付て大いに繁殖せしめた支那の康熙己丑の年にも饑饉があり雍正乙巳丙午の年にも食料が欠乏したので彼等兩人は国頭村は勿論大宜味、久志、恩納辺までも発送して賑給したので政府は厚くその功を賞したとある

交通不便の時代には一旦食料が欠乏した時にはおいそれと持つて来る訳にもいかないので蘇鉄のやうなものまで備へたものと見へる今より百年位以前即ち尚灑王二十二年の饑饉など□随分ひどかつたと見へ蘇鉄でも追つかず政府も倉を開いて救済したが餓死するも実に三千三百五十八人の多きに達したとある

蕃庁の農務当局たる田地奉行は春秋二回農村を巡検したがその時には各村の山野に植てある蘇鉄の本数を点検するほどそれほど重く見て居たやうだ

併し文通の便利な今日になつてはそれほど必要もないから蘇鉄の重要さも余程減じて何れの山野もあるにはあるが今は暁の星のやうに□か見へない

蘇鉄地獄の由来をしいて探せばマアこんなものだが今日では如何に食料が欠乏しても経済が窮迫しても蘇鉄のお世話になるやうなことは滅多にあるまい、それは蘇鉄地獄の銘を打たれた大正十三年の食料を調べたら分る

久米島の旱害につき 県技手 平良徳助

はしがき

緑の島水の郷として知られた久米島が旱害に襲はれたといふ事は誰もが驚いた事であつた、早魃について聯想さるゝのは南部で喜屋武、摩文仁中部で本部村桃原、瀬底島、伊江島等錚々たるもの誰も之を否むものはあるまひか久米島のそれに到りては一寸意外とする処である史実を籍りる迄もなく灌漑を語るものは必ず久米島を語る程で古来子孫の為に美田を残した父祖の功績は羨ましき限りとされて居るのである然るに「旱害異常」「要救済」等と伝えられては考へざることを得ない今回機を得て其原状を視因□て起る源因を質すに及びこれは決して今日一朝一夕に起つたものでなく種々の素因と時の流れの結合が茲に臻らしめた事が判つた本文を草したのも未だ見ぬ人と共に視俱に考へんが為めである同じく久米島と云つても寧ろ排水を必要とする仲里村□具志川村と俱に住む皮肉な事実の為に命題の不当を鳴らさるゝ虞なしとしないこれは筆者の別に用意のある処で恰度

美人の黒子が必要であると一般である事とお解釈を願ひたい

[後略]

88. 昭和3年9月8日2面 沖縄昭和新聞

琉球の地割制度 (二) 仲吉朝助 (遺稿)

[前略]

村には「内法」なるものあり。元不文法なれども其後成文法となれり。村の公益、風紀等を紊し、耕作を怠る者等に対し罰金、絶交、所払等の罰則を設け、嚴重に之を励行したり。之れが一例として左に島尻方南風原間切の「原勝負」(農事勝負)に関する内法を掲げん

[中略]

- 一、棕櫚手入方無之壺本に付同五貫文づつ
- 一、芭蕉芋敷草不仕方壺坪に付同五貫文づつ
- 一、同垣仕合不□届候方壺間に付同参拾貫文づつ
- 一、棕櫚種子蒔の敷草仕取糞相用ひ無之方壺坪に付同拾貫文づつ
- 一、同垣垣仕合不行届候方壺間に付同貳拾五貫文づつ
- 一、苗松之儀苗程少又は本数不足方壺本に付同参貫文づつ
- 一、萩註四敷手入方不行届方壺坪に付同貳貫文づつ
- 一、蘇鉄子植付方不行届方壺本に付同貳貫文づつ
- 一、屋敷囲苦竹植替不行届方一家に付貳百貫文づつ

右間切中諸仕付勝負之儀此勤より仕不足之所は個条之通り科錢相定置候間每家内雑子拔仕候様人別可申渡置候此段兼而致問合(註五)候以上

附掟頭耕作当は仕不足之輕重吟み之上其科申付候事已止

(乾隆三十八年なるべしと云

(註一—五)「いふ」とは土が水と共に流れ来りて沈澱せるものを云ふ「土手」とは検地の印にして今日所謂根点なり「糞」とは肥料のこと「萩」とは甘蔗のこと「問合」とは琉球の俗文句にして即ち照会若くは通知と云ふ場合に此文句を用ゆ。

89. 昭和7年9月16日□面 沖縄朝日新聞

久米島 植物採集記 (2) 多和田眞淳

[前略]

有名な涙石もあの辺にあると聞く、今から思へば此砂丘を見落したのは同島採集中の不覚の一つだ。ハマエンドウも此一带にあつたのだ。真謝附近は相当古くから住民が居住しているに違ひない、福木の老木が背中合せにすくすくと伸びて居るのは正にそれを物語っている。字宇根の喜久村と云ふ家の庭に高さ実に驚く勿れ二丈、枝の分枝三十五を算する大蘇鉄がある。斯様な大蘇鉄は世界広しと云へども又とは無い。珍品を通り越して天然記念植物だ。[略]

90. 昭和14年8月27日 沖縄日報 2面

蘇鉄の話 (一) 鹿児島高農教授 農学博士 西田孝太郎

一

植物学上、ソテツ属に属するソテツの種類は、頗る多いのでありまして、数十種の多数に達するのであります。所がそのソテツ属の植物の中で、吾々が普通に見る蘇鉄即ちシカス、レボルタと言

ふ学名のついた蘇鉄は我が国以外には産しないのでありまして、又我が国内でも、御承知の通り觀賞用としては広く内地に栽植されて居りますが、その自然的分布を観ると実に鹿児島県特に奄美大島及び沖縄県下一帯の極狭い範囲に限定されたものであります。即ちその北限は薩隅両半島の南端でありますし、南部は沖縄県の八重山諸島までを以て限界とするのでありますこの種の蘇鉄はかくの如く極狭い範囲内ではあります、然かも極めて多量に産出し、その利用価値の大なる点に於て遠く他の種類の蘇鉄の及ぶ所ではありません。我が台湾の一部には、タイワンソテツと言ふ種類か自生して居りますが、これなど□単なる標本的的存在であつて全然利用価値のないものであります。以下単に蘇鉄と申しますのは我が国特有の普通の蘇鉄を意味するものと御承知願ひ度いのであります。

二

或人は奄美大島や沖縄に於ける気の毒な名物として、颱風とハブと蘇鉄を挙げて居ります。成程颱風とハブとは誠に厄介であります、蘇鉄までも、蘇鉄地獄等と称へてその仲間入りをさせて居るのは妥当ではないのであります。私は、蘇鉄はこれ等の地方に限つて特に天か恵んだ最も大切な尊重すべき植物であると考へているのであります。その理由は以下述ぶる所で御判りであらうと思ひます。

91. 昭和14年8月28日 沖縄日報 2面

蘇鉄の話 (二) 鹿児島高農教授 農学博士 西田孝太郎

二

奄美大島や沖縄一帯は昔から頻りに颱風の襲来を受けて島民は屢々飢饉に悩まされたのであります、さういふ時にはこの蘇鉄を唯一の食物として僅かに露命を繋ぎ得たのでありまして、このことは幾多の古書によつて明かな事実であります

代官記といふ書物に「天保四年五月より雨降り続き、去年の早魃大風にて黍□唐芋、相痛み、非常の凶作云々……此夏まで山野の蘇鉄を以て漸□助命云々……」とあります。又南島雑話といふ本には「此島米少なければ唐芋を多く植へて第一の食とす、唐芋不作して買人少なければ島中一統の事とて外に求むべき食物なく蘇鉄を常食として云々」とありますし尙「蘇鉄を夥敷植へて凶年の用意とす」などとあるのであります。

以上は昔のことではありますが、今日でも年々遭遇する飢饉に際して屢々蘇鉄は代用食に供せられるのであります。一昨年沖縄県の宮古島を襲つた颱風は島民を飢饉に悩ましたのであります、県事務課の調査によると其の時小学校における蘇鉄食児童の総数は四九〇名に達したのであります。

元来蘇鉄は湿地でさへなければ如何なる瘦地にもよく育つのであります。例へば海岸の砂地や、岩石の上などにさへ生育繁茂し得るものであります。これは蘇鉄の根に一種の藻類□共生して居ります為めに空气中の遊離窒素が同化し得るからであると言はれて居ります。而かも蘇鉄はその樹勢□頗る強健でありまして、暴風に倒れず烈風に傷まず、早魃に堪へ、又肥料を施すとか、その他の手入の必要なく、栽植□全く放任して居て盛に繁茂するものであります。

でありますから、蘇鉄はそれ自身救荒食品として極めて重宝なものであります、又同時に防風林として広く利用され、或は土砂打止の目的の傾斜地にも盛に栽植されて、他の作物の保護等にも使用されるのであります。かくの如き蘇鉄の、奄美大島や沖縄のやうに頻りに颱風の襲来を蒙り飢

饑に悩む地方に限って分布自生してをりまして、而してこれを栽植利用し得るといふことは、私が蘇鉄をもつて、これ等の地方の天恵植物であると解する所以でありまして、誠に意義深いことゝいはねばなりません

92. 昭和14年8月29日 沖縄日報 2面

蘇鉄の話 (三) 鹿兒島高農教授 農学博士 西田孝太郎

三

実に蘇鉄は大島や沖縄に於ては唯一の救荒植物として利用されて来たものであります、従つて蘇鉄の栽植と言ふことは古來為政者によつて大に奨励された所であります

球陽と言ふ書物は今から二百年余りに首里王府の編纂に係るものであります、其の巻の十二に琉球本島の奥邑の宮城、神里といふ人達が隣村の辺戸から蘇鉄の苗を取つて来て之を自分の村に植付けて後年の凶作に備へたといふので時の尚敬王に表彰されたといふ記事があります

又八重山農務帳といふ書物には「蘇鉄の儀飯料の補に相成り、殊に耕作不能成る場所、石原、兼久地(海岸のこと)に寒暑、風雨を構はず生致候物にて別て重宝成る物に候間惣頭一人に付十本宛植付可き候事」とあります

尚琉球本島の農務帳には「蘇鉄の儀凶年の補にて候一人に付三十本宛の例を以て年々植付け、本数帳面をもつて取締らせ数毎□改候事」と言ふ条文が見られるのであります、尚同時に蘇鉄の栽植を励行しない場合の罰則をも定められて居るのであります、今日でも大島の農家には旧正月二日の仕事初めに蘇鉄を植付けるといふ習慣が残つて居る所がある位であります

一寸附加へておきますが蘇鉄はその種子も茎も共に食用に供することが出来るのであります

四

以上申述べました様に蘇鉄は、その産地においては救荒食品として最も重要なものであります、一種の有毒成分を含むために、そのまゝこれを食用に供することは出来ません、従来その食用法を誤つたために中毒を起し、時には死亡するものも珍らしくなかつたのであります、そんな事情のために飢饉に際して最も重宝な蘇鉄ではあります、一面その有毒成分を含むといふので恐れられたのも無理からぬ次第であります、茲において首里王府は飢饉に備へるために蘇鉄の栽植を奨励すると同時に一方その中毒の危険を救ふために雍正十二年といひますから今から約二百年ばかり前に、各間切(間切りとは村のこと)に蘇鉄の食用法並に中毒に対する手当等を詳しく記述した「蘇鉄製法」といふパンフレットを配付して居りますが、農家は今日でも大体その方法によつて毒素を除いて居るのであります

明治十三年には沖縄県令として「食用蘇鉄製法」の件が諭示されて居ますが、要するに之は蘇鉄の茎から葛粉を製する様にして丁寧に澱粉を製造する方法を教へたものであります

93. 昭和14年8月30日 沖縄日報 2面

蘇鉄の話 (四) 鹿兒島高農教授 農学博士 西田孝太郎

六

蘇鉄澱粉は他の澱粉と比べて、その性質にどんな差異があるかと申しますと、先づ糖化の難易を

比較しますならば、澱粉のジアスターゼの作用で砂糖に変化するのですが、澱粉の種類によつてその糖化に難易の差があります。

米麦の様な禾本科植物の澱粉の糖化速度は最も遅く、サツマイモの様な闊葉植物の澱粉は比較的速度であります、所か蘇鉄澱粉は□種子のもの、茎のもの共に闊葉植物の澱粉に似てその糖化は極めて容易であります

其他の性質は種子澱粉と茎澱粉とで異つた点もありますが、概して言へば矢張り闊葉植物の澱粉即ち塊茎澱粉の性質に類似し、禾本科植物即ち穀実澱粉に比ぶれば相当異つたものであります

七

次に蘇鉄を澱粉にまでせずに、食品化するには如何にするかの問題について述べてみたいと思ひます 蘇鉄は、種子でも茎でも、澱粉を製すれば勿論毒素の除去は完全であります、それでは同時に澱粉以外の蛋白質、脂肪其他の栄養素□凡ては損失するのであります、夫故に毒素丈けを除いて栄養分の損失を免れる方法を講ずることが必要な訳であります、従来行はれて居る方法でも充分丁寧な念入りに処理すれば差支へありませんが、日数を要する上に色々の欠点に伴ふのであります

蘇鉄地獄と言ふ言葉が時々使はれる様であります、これは悲惨な飢饉に悩む窮乏の大島や沖縄の代名詞として使はれる言葉であります、即ち飢饉に際して食料と言ふ食料が食ひ尽されて、唯一の最後の食物である蘇鉄を危険と知りつゝも、充分な処理を施す余裕がなく、急いで食用に供する為に中毒すると言ふ悲惨事から生れた言葉であります

一体有毒成分といふのは何かと申しますと、これは吉村博士によつて知られた事実であります、フオルムアルデヒドつまりフオルマリンであります、この物質か他の物質と化合して配糖体の形態をして居るのであります

この配糖体は水によく溶解するので、之を除去することは比較的容易でありまして、種子の乾燥粉末を一昼夜以上水に浸漬して、時々攪拌して水を更え、最後に布又は箆を以て濾し、次に煮沸又は蒸煮等の操作で煮出せば毒素は充分除去されて食用に供することが出来るので頗る簡単であります、かくの如くして得た無毒の蘇鉄を「食用蘇鉄」と名付けたいと思ひます食用蘇鉄の風乾物中には澱粉を約七〇%、蛋白質を一二%含んだもので食用又は加工用として有効なものであります

次に茎でありますか、蘇鉄の茎には多量の粘質物があつて、それが邪魔致しまして、種子の様に簡単に処理し得ないので、従来の様な醱酵法を改良した程度で満足せねばならないと考へます

94. 昭和14年8月31日 沖縄日報 2面

蘇鉄の話(五) 鹿兒島高農教授 農学博士 西田孝太郎

七

次に蘇鉄味噌、蘇鉄醤油について申述度いと思ひます。蘇鉄特に其の種子は味噌或は醤油醸造に於て、米或は小麦の代用として至極適当なものであります。蘇鉄□造つた麴は風味が極めて良好で恰然甘栗の様な味であります。蘇鉄の産地たる奄美大島や沖縄県は米及び小麦を年々多量に移入しているのでありまして、蘇鉄を以て之を代用する企ては、農家の自給自足といふ見地からも必要なことであつて、重要な一利用法といふべきであります

只この種の味噌醤油が毒分を含むのではないかとの懸念を抱く人もあるかも知れませんか、全然

心配無用であります。私は実際に味噌や醤油を度々製造して、化学試験を行つた結果、全く毒の心配のないことを知り得たのでありますのみならず、味噌の如きは風味頗る良好でありますし、又白鼠に就ての試験結果は標準食以上の好成績を示した程であります

九

最後に蘇鉄の用途を一括して申しますと、次の如くでありまして極めて広いことが御判りになると思ひます

第一、一般食用であります。種子及び茎は毒成分脱除後一般食用として米の代用となすことが出来るのでありまして、かくの如く除毒した蘇鉄を食用蘇鉄□称へるのであります

第二、加工用□であります。即ち食用蘇鉄は菓子類、団子、飴等の加工原料に供することが出来るのであります

第三、澱粉用でありまして、種子茎共に澱粉の原料として利用されるのであります

第四、醸造用、□種子及び茎は醸造物特に味噌、醤油の原料として利用することが出来ます、この場合には殊更に特別の除毒法を行ふ必要はありません。アルフールの原料としても利用出来ることは勿論であります

第五、薬用□に利用されて居る様であります。私は薬用としての研究を致したことはありませんが、従来種子を内服し、又は傷、腫物等に塗布すれば特効かあると言はれて居ます

高瀬氏の著書によれば□蘇鉄は、健胃、強壯及通経、収斂薬に用ふる外鎮咳、法痰に用ひらると言ふことであります

日本民間薬草集覧によれば、蘇鉄の種子の煎汁が本邦各地に於て肋膜炎、肺尖カタル、腎臓炎、中風リウマチス、血ノ道等の薬として用ひられて居ると言ふ、一般に毒は薬となり、薬は毒でありますので、蘇鉄の毒が薬として作用することは考へ易い道理であります。特に利尿的効果などは極めて合理的的作用の結果であると考へられます。然し乍ら何と言つても毒でありますので濫りに内服するのは危険が伴ふので余程注意せねはならないと思ひます

95. 昭和14年9月1日 沖縄日報 2面

蘇鉄の話(完) 鹿兒島高農教授 農学博士 西田孝太郎

第六、装飾用、葉は生花や花輪等の装飾用としても使用されて居ます、殊に花輪用としては欧米へ輸出される位であります

第七、観賞用、広く盆栽蘇鉄として観賞用に供せられるのは申す迄もありません

第八、地力増進用□葉は窒素養分に富んで居りまして緑肥としての肥効が大いなのであります、又蘇鉄はその生育中空窒素を固定する作用かありますので土地を肥やすことにもなるのであります

第九、土砂打止用、急傾斜地にもよく繁茂して土砂打止の用に適するのであります

第一〇、防風林用、颱風、塩風等に対する抵抗力が極めて強いために蘇鉄を耕地の周囲に栽植し□防風林として利用されるのであります、この蘇鉄□防風林の最も著しい所は沖永良部島の国頭地方であらうと思ひます、狭い一枚の畑の周囲が凡て蘇鉄で、そんな畑ばかりの集りでありまして、実に見渡す限り一眺蘇鉄平原ともいふべき見事さであります

第一一、エムルジンと称す□酵素材料として利用することが出来るのであります、これは學術上の研究材料として必要なものでありますか、我国には適当なエムルジンの材料かないのであります、蘇鉄種子は特に、我国に於て最も好適したエムルジン材料と言ふことが出来るのであります

今日までの所、蘇鉄の用途としては、ざつと以上様な項目を挙げて差支へないと思ひます

結 び

私共はよく大島振興だとか、沖縄救済だ□か言ふことを聞きますが、夫々当局者によつて適切な更正策が講せられて居る様でありまして誠に結構なことゝ存じますであります、私はこの窮乏対策の一として是非蘇鉄□利用を織込み度いものであると考へるのであります、何も立派な耕地に

蘇鉄をうへよと言ふのではありません他の作物には不適當な場所□然かも蘇鉄□栽植地としては少しも差支へない余地が尚頗る多い様に見受けられるのであります

かくの如き土地に盛に蘇鉄の増殖を図り、充分その利用法を講じ単なる自給自足に満足せず、大規模の加工原料として之が利用の道を開くことは、大島や沖縄独特の天然資源を開発する所以であり、最も天意に叶つた対策でありまして、これ等の地方の自力更生上重要な役割を演じるものであると信ずる次第であります

96. 昭和15年2月14日 沖縄日報 2面

支那向け輸出 ソテツ味噌／大量注文に応じ得ず

大亜公司大阪支店では支那からソテツ味噌の大量の注文が来たので県へ価格や品質、運賃等につき照会してきたが本県にはかゝる大量の取引に応ずるだけの蘇鉄味噌がなくその旨回答した

97. 昭和15年3月13日 沖縄日報 2面

含水酒精の原料に 蘇鉄も登場す／甘蔗の生取引を照会

鹿児島市に酒精工場をもつ日本含水酒精会社鹿児島出張所では先に本県産甘蔗を原料に購入すべく生いも□十六万貫を購入契約したが更に生蔗を原料に使用しソテツの実も原料に供する工夫をこらして県へ左の如き照会を發してきた、これが取引実現すればソテツの実蒐集や蔗の生売で本県産業に多大の福利をもらすこととならう

生蔗の生産量、生蔗売価格、砂糖百斤価格および^{ママ}税額砂糖取引状況その他
ソテツの分布状況、実の一年間生産量及び現在の利用状況、その他

98. 昭和15年3月15日 琉球新報 1面

酒精原料に蘇鉄使用／酒精会社で調査

全国酒精原料会社鹿児島支店では酒精原料に供用する目的で本県下の蘇鉄の生育状態を次に調査することとし県当局に次の事項照会した

蘇鉄の分布状況、同果実の一ケ年生産状況、同現在利用方法、其他参考事項

99. 昭和15年3月18日 琉球新報 2面

酒精原料に甘蔗代用／原料会社で計画

全国酒精原料株式会社鹿児島支店では原料甘蔗の獲得難で昨今代用原料の発見に努力しているが差し当り、蘇鉄、甘蔗に代用原料を求めることとし本県に対し左の事項照会して来た

甘蔗総生産量△売買価格及其法△砂糖百斤□公定価格及種類△砂糖取引状況其他参考事項

100. 昭和15年4月1日 沖縄日報 2面

蘇鉄も重要資源に／澱粉製造業勃興す／南洋殖産五万トン目標

時局の波に乗つて澱粉製造が重要産業として擡頭するに至つた、即ち従来澱粉生産額は北海道の馬鈴薯による十五万トンを主として全国で廿五万トン程度であつたが、事変に伴ふ物資の輸入制限で外国より仰いでいた高等粉の原料輸入が杜絶したのに反し、飴の需要、人絹紡織界の需要は急激

に増加し更に北支満洲国方面への食糧輸出も増加するに至ったので今や全国的に澱粉飢饉時代を招来し、これに伴ひ澱粉製造事業が勃興しつつある、台湾ではキヤツサバが甘蔗の対抗作物として糖業界を脅かし始め甘藷と共に公定価格で原料を抑へているが、それでも栽培面積が急に増加しつつある

此の波に乗つて本県でも大規模の計画が進められている、市外坂下の南洋殖産株式会社が一日五万斤の原料消化を目標に原料水洗より沈澱乾燥に至るまで全部動力による設備を目下急ぎつつあり来る六月までに竣工事業開始の予定である、同社では坂下工場の外県内主要地十ヶ所に一日一万五千斤程度の原料を消化する工場をも設置し年産五万トン(千六百万円)の生産をあげるべく意気込んで□る

原料は甘藷の外キヤツサバ、アロールトを昨年以来、国頭島尻各離島方面に奨励しつつあり更に蘇鉄が無尽蔵にある、蘇鉄は旧藩時代より飢饉に備へて奨励されその実はもとより茎も食糧に供されているが、兎もすれば中毒を起すことあり蘇鉄地獄は疲弊沖縄の代名詞の如く使用されたこともある、此の蘇鉄より製造した澱粉は質がよく他の澱粉に比し倍値で取引されるほどであり□県下の蘇鉄は四億五千万斤を下らないと推算されるから一日に十万斤消化しても一ヶ年で三千六百五十万斤に過ぎず、しかも蘇鉄の繁殖は切るほどよいと言われているから原料難に陥る心配はなく地獄に冠せられ蘇鉄が今や重要資源として重宝がられるようになったわけである

101. 昭和 15 年 5 月 2 日 沖縄日報 2 面

座間味村で 蘇鉄の切干／急救飯米特配を陳情

座間味村では半農半漁を営み甘藷も栽培して米、甘藷を主要食料に供しているが昨年の暴風で諸の収量激減した上に米の配給量は去る十八日一人三合を配給し二十三日一合づゝを配給したのみで専ら代用食を求めるのに躍起となる一方村では応急対策として蘇鉄の切干をなさしめるとゝもに諸の植付を督励している。而して切干している蘇鉄は毒消しその他の処理で一ヶ月後でないとう食用に供せられず諸の牧獲は六月に入らぬと供給し得ぬ有様なので飯米飢饉のもたらす影響と窮迫せる食料急救に飯米の早急特配方を県へ懇請してきた

102. 昭和 15 年 5 月 13 日 琉球新報 2 面

蘇鉄を原料に 代用品発明

特許局では山城正□氏申請に係る蘇鉄の粘□液を主材とする牛乳「カゼイン」代用品及び蘇鉄澱粉を主材とする「セルロイド」代用品製造研究中牛乳「カゼイン」代用品製造の研究発明期間延長の件承認する旨県商工課へ通牒してきた

103. 昭和 15 年 5 月 24 日 琉球新報 3 面

節米に蘇鉄食！／離島渡嘉敷村で切干貯蔵／一日一回は飯米代用に実行

離島渡嘉敷村では最近の飯米払底と芋不足から代用食糧として野生の蘇鉄を取り入れ村民三百戸のうち二百五十戸位は蘇鉄の切干を貯蔵し、残り五十戸位は既に飯米代用として蘇鉄食を一日一回位実行して節米と代用食糧励行に努めている

104. 昭和15年7月11日 琉球新報 4面

蘇鉄 思哉

颱風に甘藷がやられると、航路□の沖縄は何時も殺人的飢饉に襲はれるのである。

決つたやうに、年に数回、我等の祖先が、それ等の困苦によく堪へて来たのは、彼の耐風百パーセントの食糧原料、蘇鉄があつたからだ。

蘇鉄は、孤島□□を救い試練と死の□□より救ひ出してくれた生命の恩人であると云はねはならぬ

しかし、国力の進□、文化の進歩に、航路の短縮などに依つて、糧食補給、その他、事欠かぬ今日となつては科学者からは栄養価が乏しいと云はれ、台所からは、マヅイの？毒の？と非難□出、蘇鉄は困苦知らぬ人々から厄介扱ひにせられ、そうして彼方の丘から焼き払はれ、此方の杜からは切り捨てられ、稀に一つ奇形に生□たのが盆栽となつて、閑人の寵愛をうけて居るだけだ。

私は、野に、山に、到る処に繁茂している蘇鉄を見る毎に、彼のエジプトに売られたヨセフの事を思い出す。

今は奥山に隠れていたヒグも、海岸に忘れられていたマングローブも、それから全身に針のあるために人々から鬼のやうに嫌はれていたアダンの幹までが時局柄なくてはならぬ。

尊い物資の原料となつて県民に喜ばれている□だ。

存在の意義をさへ認められず、叩切られて惜しげもなく、田畑の肥料にされている蘇鉄も、やがては、彼のヒグま mangrove 以上に□真価□認められ□凡ての人々から寵愛せられる日か来るであらう。？…

火に焼けて、黒焦げにされても時期が来ると、平気で芽を吹く、彼の更生力の強い蘇鉄！

ソテツは、非常時沖縄を背負ふて起つべき地中のこう龍である。

105. 昭和15年7月30日 沖縄日報 2面

蘇鉄味噌の原料と 販路の開拓を／醸造元・鶴田氏調査に来県す

鹿児島高農教授西田孝太郎博士の創案に成る蘇鉄味噌は鹿児島市の十八商会食料品部において事業化され軍部への納入で実用されているが西田博士は□県における蘇鉄の研究のため二十八日来県したが十八商会主鶴田嘉次郎氏もともに来県□本県における原料の購入、蘇鉄味噌の販路開拓のため種々調査を行□ている、目下麩□における蘇鉄味噌の価格は斤十五銭でとても安価で栄養価値はいゝので喜ばれているが鶴田氏は語る

時局下食糧品たる米麦を原料とする味噌に蘇鉄実を代用し得ることは食糧確保の意味で重要な事だと思ふので味噌だけでなく醤油製造も計画している、鹿児島における軍部官庁や、学校官公衙の用は十分足し得ているが営利事業ではあつても食糧確保への協力と学理的研究によるものであるから之を事業化して行くといふ二つの方面から相当の営利を無視した営業方法で経営して現在に至つている次第だ、蘇鉄味噌が出来たといふので大島における蘇鉄実の値段も三銭内外から七□八銭に高騰しているが、大島郡における副業の発展に協力して行く意味でその値段で購入してやつている、何でも蘇鉄実だけの採集で六百円も収入を得たのもあるといふ事であつたが肥料も要らぬし手数もかからぬし単に採集する少しの労力を要するものであるから農家にとつてこれほど有益な副業はないと思ふ、今度□県したのは西田博士が研究さるべきのがあるといふので私

もついて来た次第だこれから沖永部に渡つて郡農□と取引の斡旋状況等を視てかへるつもりである□本県でも同様の方法でやつて貰へば利益率の多い副業だと思ふ、年額百万斤の味噌をつくるのに千二百万斤の蘇鉄実を要するのが将来五百万斤づ□の製造をして行くつもりだから本県においても原料採集と味噌の販路につき協力願ひたいと思つている、ソテツ味噌といふ名前がけないから何とか外にいゝ名称を□けたらといふ話もあつたが科学的に研究の完成されたもので結構蘇鉄味噌でいゝと思ふから□その名で売出した、摺り味噌にして蒸□殺菌を加へたのが斤価十五銭だから主婦としても手数はかゝらぬし便利だ□最初は「ソテツ」といふ名で手出しかねるさうだが一ぺん使つてみたらもう二回目からは手放せないといふ立派なものだから将来これが販路は十分開拓する自信がある何は兎もあり使つてみてから評してもら□事た□特許も出来たし大豆も特別に分けて貰へる事にな□たのでウンと製造して行きたい、本県においては樽を回収して価格から差引いて行けば相当安くつく事と思ふ

106. 昭和15年8月1日 琉球新報 3面

けふの話題

三十一日大阪商船神戸支店から那覇支店へ奇妙な照会電報が来た一電文によると「去る二十六日那覇港発三十日午後三時半神戸へ入港した浮島丸の貨物中蘇鉄澱粉二箱を荷揚げしたところ澱粉と思ひの外箱の中からニョキニョキと何と二十八匹の毒蛇ハブが現れた、屹驚したのが神戸支店員や仲仕君、同支店では二十八匹とは怪しい、三十匹から二匹位船内に逃げ出したのではないか？そいつは大変だと大恐怖早速那覇市店宛に

浮島丸貴地積み当地揚蘇鉄澱粉二箱浮船揚げ□ハブ二匹出た貴地何匹積みしや取調べ返以□荷□注意せよ

と警告的照会をして来た藪から棒の奇妙な電文で那覇支店では□返し神戸支店宛「当地積出しなりや受取人発送人氏名知らせ」と返電したところ慌てた神戸支店発送先を調べた結果、那覇積出しでなく大島からの荷と判明、物騒な貨物に今更ら恐や恐や。

107. 昭和15年9月19日 琉球新報 3面

蘇鉄の実や麦の代用食で凌ぐ／離島粟国村へ飯米増加要望

離島粟国村では本年八月ごろまでは甘藷豊富のため□常食糧は心配なくやつてゆけたがその□甘藷なくなり代用として□麦や蘇鉄の実等を用ひているが古□甘藷は潮害のため□□枯死し□植は不作で最近島民の食糧□届となつたので同村駐在仲井間巡査より那覇署を経て県へ同村への飯米割当増加方につき事□報告して来た

108. 昭和15年10月2日 琉球新報 1面

蘇鉄の実から 家畜の飼料／厚生省技師が資料調査

厚生省技師池田□氏は現下家畜飼料不足の折柄沖縄地方に自生繁茂する蘇鉄の実をもつて家畜の濃厚飼料として研究に着手し県武田衛生課長宛色々資料蒐集方につき依頼して来たので左記事項につき各町村長宛蘇鉄実に関する照会を發した

一、蘇鉄果実の貴町内に於ける一ケ年□□予想高 単位貫)

一、蘇鉄果実を拾集し得らるゝ経済面積及其地区より生産収穫を予想される数量

109. 昭和15年10月5日 沖縄日報 2面

蘇鉄澱粉／価格を指示

国頭郡大宜味村根路銘平良源吉氏より申請の蘇鉄澱粉は那覇市における販売価格を一斗（四貫）六円八十五銭□大宜味及□の附近産地価格を六円五十銭に指定実施した

110. 昭和19年12月11日 沖縄新報 2面

蘇鉄で中毒死

宮古郡多良間村字塩川MJ（三二）は去月十一日家族と共に夕食として蘇鉄に干芋を混ぜ筍（俗称マータケ）と共に食したが翌日午前四時頃本人と弟J（一五）同J（一〇）三名が中毒症状を起こして同日午後死亡、続いて母と妻の兩名も翌日死亡、弟J（一九）も相次いで死亡、八名家族のうち蘇鉄を喰べなかつた二名の幼児を除き六名とも中毒死した

111. 昭和20年1月23日 沖縄新報 2面

何でも食へるぞ、／野生植物の食糧化

県民の決戦食に登場した野草を出来得る限り広汎圏に亘つて調査研究し本格的に加工貯蔵するため県食糧配給課では民間の権威者六氏を囑託し去る十九日第一回の研究懇談会を開いたが調査対照としては県下山野に繁茂する野草類から海藻その他従来捨てられて顧みなかつた海草類ものこりなく研究し量もあり採集価値あるものを積極的に食糧化することになり次の種類があげられた

野草類 野アヲサ、スベリヒユウ、ツハブキ、野アザミ、ツルナツルムラサキ、野菊、カツコウアザミ、クサギの外ヤブニツケイ、水前寺菜マコモ

海草類 ホンダワラ松、□藻ヒジキ、岩ノリ、ミル、モツク

この外主食代用として椎の実やかしの実蘇鉄の外クワツ芋や海草の牡丹アヲサも何とか研究して食糧化を図り更に椿、サザン花、ヤブニツケイ等の油脂食糧も調査研究する、なほ一中教諭多和田眞淳氏も囑託した

112. 昭和20年2月5日 沖縄新報 2面

決戦食はこれで／学童動員し野草蒐め

野草でも海草でも食用となるものは残りなく取りあげ乾燥し又は加して県民の決□非常食糧として大がかりな蒐□貯蔵を実施することになり県食糧配給課では植物学会の権威数氏を委嘱し調査研究中であるが差し当り県下山野海に繁茂する左記の野生草木実、蒐集し両先島離島は各家庭に本島各市町村から蒐荷されるものは県食糧営団が取扱つて貯蔵し決戦食糧としてお役に立てることになつた

木の実類、蘇鉄の実、椎の実 榧の実

野草類 山アヲサ（モアサ）ツハブキ（チパバ）スベリヒユウ（ニンブトカー）ツルムラサキ（ジーピン）ツルナ

海藻類 モゼク（スマイ）ホンダワラ（ムー）松葉藻（ムー）

その他 大根葉、豌豆の葉、人参の葉

蒐集には県下国民学校の学童や婦人団男女青年団を動員し積極的蒐集運動を展開し学童は一人一貫匁以上の野草を集めさせ十分乾燥□□を行って営団へ引つぐことになっている。

113. [昭和] □年□月□日□面 [紙名不明]

水無月と………面白い動植物季節／沖縄測候所の発表

六月の動植物季節につき昨日沖縄測候所では左の如く発表している

ニイニイ蟬 (俗称ジューワジューワ) (鳴き声を聞く) 六月七日 (平年より五十三日早く昨年より三十六日早し)

クマ蟬 (俗称サンサナー) (鳴き声を聞く) 六月二十日 (平年より四日早く昨年より廿三日遅し)

アブラ蟬 (俗称ナービカチャー) (鳴き声を聞く) 六月二十六日 (平年より九日遅く昨年より二十九日遅し)

暴風トンボ (初めて見る) 六月廿六日

黄金虫 (初めて見る) 六月廿六日

蘇鉄 (雄花) (高さ四三糎) 六月二日 (昨年より六日早し)

シマハマボー (俗称ユナー木) (開花す) 六月二日 (昨年より六日早し)

月橘 (開花す) 六月十六日 (昨年より一日遅し)

龍舌蘭 (開花す) 六月二十三日 (石垣島より五十四日遅し)

ハマオモト (開花す) 六月二十五日 (石垣島より四十一日遅し)

114. □年□月□日□面 [紙名不明]

◇世界一の大蘇鉄

読谷山村字伊良皆屋号儀保に直径二尺五寸、高さ一丈五尺の四百年間になる大蘇鉄があると云ふ話に、物好きの首里市会議員の城間理王君、早速見物に出駈け、その大きなのに喫驚して帰宅の際汽車中でその珍談を持ち出すと更に他の乗客の談で驚いたのは全村字座喜味屋号前松田に一本の幹から枝葉が出てそれが更に根を張つて二十坪も拡がっている恐らく世界無比の大蘇鉄があると出られたの□理王君捲いた舌を更に□巻。